

令和7年度 老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業

地域外の者の関与もふまえた互助の持続可能性を高めるための地域づくりのあり方に関する調査研究

報告書

令和8(2026)年3月

特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター

**地域外の者の関与もふまえた互助の持続可能性を高めるための
地域づくりのあり方に関する調査研究
報告書**

目次

第1章 事業概要	2
1. 研究目的	2
2. 事業実施概要	3
1) 研究委員会の設置・開催	
2) 「地域外の力」協働事例ヒアリング調査	
3) オンラインフォーラムの開催	
4) 報告書の作成	
第2章 「地域外の力」協働事例ヒアリング調査	8
・調査概要	
・調査結果概要	
第3章 『地域外の力を活かす ～ 地域の協働力の磨き方～』 オンライン全国フォーラム開催	22
・フォーラム概要	
・プログラム	
・企画背景となる問題意識	
・プログラム意図	
・参加者からの評価	
第4章 事業総括・提言	38
・「地域外の力」が必要とされる背景	
・地域外の力が生きる条件	
・各主体への示唆	
・今後の展望と課題	
・まとめ	
参考資料	
● フォーラム告知チラシ	45
● フォーラム当日資料	47
● 実践事例ヒアリングシート	112

1. 研究目的

介護予防・日常生活支援総合事業や生活支援体制整備事業にあつては、住民同士が支え合う「互助」があることを前提に、それを支援・強化し、地域住民自らが問題意識をもって課題解決することのできる地域づくりを進めることとしてきた。

生活支援コーディネーター※の別名が、地域支え合い推進員であることは、その表れと言える。

この地域づくりを支えるのは「よそのもの・わかもの・ばかもの」と言われる。このうち、「わかもの」については、上の世代と比較して地域活動に対するモチベーションが弱いことが指摘されてきたが、令和6年度事業（互助の持続可能性を高めるための地域づくりのあり方に関する調査研究）での現役世代地域住民へのヒアリング調査等により、地域活動になじみのない団塊の世代以降の世代であっても、子育て等日常生活上の関心事項を通してみれば地域を意識しやすいことや、高齢者を含めた多世代による地域活動に関わることで生活上のメリット、他世代との互助関係を感じる場合もあること、高齢者の生活支援や介護予防に大きな効果を与えている場合もあること等が明らかになった。

一方、人口減少や共働きが一般的になったことなど、ライフスタイルの変化による地域活動の担い手不足という課題は存在し、このような状況下、地域内の資源のみならず地域外の資源・視点を持つ「よそのもの」との協働、特に生活支援体制整備事業での関与の可能性を検討することは、極めて重要であると考えられる。

このため本事業では、これまでの事業の成果を踏まえたうえで、有識者による委員会を設置し、以下を実施した。

- ① 地域外の手（「よそ者の視点」の意味で移住者の手を含む）と協働した地域づくり事例のヒアリング調査と、それを通じた活動の効果や生活支援体制整備における支援の可能性の検証
- ② 地域外の手を活用・協働する地域活動と、その支援の可能性をテーマとするフォーラムの開催。
- ③ ①・②で導き出された課題等を踏まえた、今後の地域づくりにおける必要な対応等についての提言を本報告書に取りまとめた。

※「生活支援コーディネーター」を、本報告書では、以降「SC」と表記する。

2. 事業実施概要

1) 研究委員会の設置・開催

本研究事業実施にあたり、地域づくり・地域支援等に知見を持つ学識経験者、行政職員、地域活動に取り組む住民組織等を中心とした研究委員会を設置・開催した。

委員長と当法人理事長以外は、厚生労働省担当者と協議のうえ、福祉分野に限定せず、地域コミュニティ分野のメンバーも含めて組織した。

【委員構成】

委員長：高橋 誠一	東北福祉大学 総合福祉学部 教授
委員：竹端 寛	兵庫県立大学 環境人間学部 教授
窪田 純子	高知県 長寿社会課 介護予防・地域支援室 室長
牧田 健太郎	沖縄県 本部町 子育て支援課
桧原 賢一	栃木県社会福祉協議会 地域福祉・ボランティア課 課長補佐
倉嶋 香菜子	株式会社 ママのHOTステーション 代表取締役
熊谷 哲周	花巻市高松第三行政区ふるさと地域協議会 事務局長
池田 昌弘	全国コミュニティライフサポートセンター 理事長
〈オブザーバー〉	
佐藤 清和	厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課 地域づくり推進室 室長補佐
原 伊吹	厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課 地域づくり推進室 地域包括ケア推進係長 (併) 地域支援事業係長
安松 泰佑	厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課 地域づくり推進室 主査

【開催日程】

◆第1回委員会

開催日：2025年8月18日（月）

会場：ZOOMによるWEB会議

参加者：委員長、委員5人、オブザーバー3人、事務局3人

議事：研究事業に関する概要説明

各委員紹介

事例ヒアリング調査について

他

◆第2回委員会

開催日：2025年10月31日（金）

会 場：ZOOMによるWEB会議

参加者：委員長、委員6人、オブザーバー3人、事務局3人

議 事：委員報告（ママのHOTステーション・倉嶋委員、花巻市高松第三行政
区ふるさと地域協議会・熊谷委員）

ヒアリング調査進捗報告

ヒアリング事例選定

他

◆第3回委員会

開催日：2025年12月9日（火）

会 場：直接会合とZOOMによるWEB会議併用

参加者：委員長、委員5人、オブザーバー3人、事務局3人

議 事：ヒアリング調査進捗報告

2月開催フォーラムについて

意見交換

他

◆第4回委員会

開催日：2026年1月26日（月）

会 場：ZOOMによるWEB会議

参加者：委員長、委員5人、オブザーバー3人、事務局3人

議 事：ヒアリング調査進捗報告

2月12日開催全国フォーラムについて

意見交換

他

◆第5回委員会

開催日：2026年3月5日（木）

会 場：ZOOMによるWEB会議

参加者：委員長、委員4人、オブザーバー3人、事務局3人

議 事：ヒアリング調査進捗報告

2月12日開催全国フォーラム報告

事例調査等からのポイント抽出

他

- 委員会は基本、ZOOMによるWEB会議形式で開催したが、12月には対面で開催し議論を深めた。

2) 「地域外のカ」協働事例ヒアリング調査

- 地域外の人と地域住民とが協働して実施する活動や、地域外からの移住者の力で活性化したり、新規に引き起こされた地域活動事例に対するヒアリング調査を実施した。
- 対象事例は、当団体の蓄積事例やWEBを含めた文献調査、委員からの推薦事例等より、委員会での討議を経て、全国から11事例選定した。
- 基本事務局による訪問ヒアリング。委員等の希望により、同行ヒアリングも行った。また、補充的にZOOMを活用したヒアリング調査も活用した。

○ 【訪問ヒアリング対象】 (右側の日付はヒアリング日時)

- ・ 諸沢悶絶マラソン (茨城県常陸大宮市) 訪問: 2025年9月5日~7日実施
- ・ 久保田青年会 (沖縄県沖縄市) 訪問: 2025年9月24日~26日実施
- ・ トレイディングケア (愛知県高浜市) 訪問: 2025年10月2日実施
- ・ ウルアス (漆の明日を語る会) (鹿児島県始良市) 訪問: 2025年10月8日~10日実施
- ・ 「結」プロジェクト (三重県鳥羽市) 訪問: 2025年10月23日実施
- ・ ママのHOTステーション (北海道音更町) オンライン: 2025年10月31日実施
- ・ 高松第三行政区ふるさと地域協議会 (岩手県花巻市) 訪問: 2025年12月25日実施
- ・ 山あげ祭 (栃木県那須烏山市)
訪問: 2025年7月27日、10月29日、11月14日、12月23日、2026年1月6日~7日実施
- ・ 高根コミュニティラボわあら (新潟県村上市) 訪問: 2025年11月28日実施
- ・ とかの元気村 (高知県佐川町) 訪問: 2026年1月12日~16日実施
- ・ 宇川加工所 (京都府京丹後市) 訪問: 2026年2月19日~22日実施
/オンライン: 2月28日実施

○調査期間 2025年9月~2026年2月

○活動開始の契機、参加メンバー、協働の契機、メンバーや周囲の人からの活動への評価等のヒアリングを行った。

○調査結果を委員会での討議に供し、本報告書に事例概要を掲載。

○調査結果は第2章参照。

3) オンラインフォーラムの開催

- 地域外の人材、団体、資源と協働した持続可能な地域づくりを考えるフォーラムを開催し、本委員会委員とゲスト、厚生労働省による対談とセッションを行い、

今後地域活動を展開・支援を行っていくにあたり、地域外の人や移住者の力を活かしていくための課題や、SCに求められる視点等について議論を行った。

【フォーラム概要】

開催日：2026年2月12日（木）13：30～16：30

会 場：Zoomウェビナー活用によるオンライン開催

参加者：（登壇者）委員長、委員7人、厚生労働省1人、ゲスト2人

○参加申し込み 441人（申込グループ数317）

○当日アクセス ピーク350弱

題 目： 地域外の力を活かす ～ 地域の協働力の磨き方～

◆基調対談「地域外の力との協働と可能性」

【発表者】都岐沙羅パートナーズセンター 事務局長 斎藤 主税

【コーディネーター】兵庫県立大学 環境人間学部 教授 竹端 寛

◆セッション「使えるものは、何でも使おう！地域の外にも目を向けて」

【発表者】株式会社 ママのHOTステーション 代表取締役 倉嶋 香菜子

【発表者】花巻市高松第三行政区ふるさと地域協議会 事務局長 熊谷 哲周

【発表者】一般社団法人 高根コミュニティラボわぁら 事務局長 能登谷 愛貴

【コメンテーター】厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課
地域づくり推進室 室長補佐 佐藤 清和

【コメンテーター】栃木県社会福祉協議会 地域福祉・ボランティア課
課長補佐 桧原 賢一

【コメンテーター】高知県 長寿社会課 介護予防・地域支援室 室長 窪田 純子

【コメンテーター】沖縄県 本部町 子育て支援課 牧田 健太郎

【コメンテーター】NPO法人 全国コミュニティサポートセンター 理事長 池田 昌弘

【コーディネーター】東北福祉大学 総合福祉学部 教授 高橋 誠一

- 本事業の報告も兼ね、地域外の人材、団体、資源と協働した持続可能な地域づくりを考えるフォーラムを開催した。
- 本事業のこれまでの成果などを示しながら、研究委員会メンバー、地域活動者、行政担当者、厚生労働省担当者等を含めた意見交換を行った。
- フォーラム内容詳細については、委員会の討議を経て決定した。
- 対象としては、市町村の生活支援体制整備担当者及びSC、地域福祉関係者を想定。

- Zoomウェビナーを活用したWEB開催。
- 広報は、前年度参加者へのメール、市町村宛てDM送付のほか、生活支援共創プラットフォーム(全国版)専用ホームページでの周知、当法人HPの告知等による。
- 参加者からは非常に高い評価を得た(5点満点で平均評点4.4)
- 詳細は第3章参照。

4) 報告書の作成

- 上記調査結果や委員会、フォーラム等での検討を踏まえ、今後の地域活動を展開・支援を行っていくにあたっての地域外の人や移住者の力を活かしていくにあたっての課題や、SCに求められる視点等について、提言を報告書にとりまとめた。
- 作成した報告書を全国都道府県、市区町村に送付するとともに、PDF化し、ホームページにアップロードした。

第2章

「地域外の力」協働事例ヒアリング調査

生活支援体制整備事業における今後の高齢者像や地域づくりのあり方を考察するため、地域外の人と地域住民とが協働して実施する活動や、地域外からの移住者の力で活性化したり、新規に引き起こされた地域活動の実態を把握するためのヒアリング調査を実施した。

以下に、本件調査概要を記す。

【 調査概要 】

- 調査名 「地域外の力」協働事例ヒアリング調査
- 調査目的 地域外の人と地域住民とが協働して実施する活動や、地域外からの移住者の力や地域外の資源・人材を活用して活性化したり、新規に引き起こされた地域活動事例を調査し、その活動効果や、生活支援体制整備における SC の関与・支援の可能性を検証することを目的とする。
- 対象地区 全国から選出
- 調査対象 選定された各事例の主たる活動主体（住民）および、地域外の協力者・協働団体
- 調査方法 ヒアリング調査（事前アポイントに基づく訪問面接ヒアリング、一部オンライン会議システム「Zoom」を使用）
- 調査対象数 事務局による文献調査や研究委員からの推薦に基づき、委員会での討議を経て選定した全国 11 事例
- 調査期間 2025 年 9 月～2026 年 2 月

○ヒアリング内容

厚生労働省と事務局が作成した原案を基に、研究委員会の討議を経て決定。主に「活動組織の概要」と「活動内容および協働の実態」の2軸で構成。

問1. 活動組織について

- 1) 組織名
 - 2) 法人格
 - 3) 組織の性格
- ① 自治会、町内会、まちづくり協議会
 - ② 地域に基盤を置く有志・志縁組織（ボランティア等含む）
 - ③ その他
 - ・ 構成員は、どのような方か
 - ・ どのような経緯（目的）で発足したのか
 - ・ 構成メンバーの数と、実際に活動している人数（おおよそでも可）

問2. 活動内容について

- 1) 活動対象（対象属性、対象年代、対象地区等）
- 2) 具体的な活動内容（メニュー）と活動頻度
- 3) 該当活動を始めた契機・問題意識（活動開始までの過程）
- 4) 活動への参加者数（運営側、一般参加者）や年代（おおよそでも可）
- 5) 活動の財源（制度的位置づけの有無、原資たる施策・予算規模）、収支状況
- 6) 活動の際、支援を受けた・協働した団体、行政の部署（公的機関、民間団体）
- 7) 各団体と支援・協働したきっかけ、期待したこと・役割
- 8) 支援・連携の際の課題・問題となったこと、良かった点。連携の評価。連携が継続しているか。
- 9) 活動の効果 ※参加者の声・感想等でも
- 10) （外部の支援・連携先に対し）支援・連携・関与を決めた理由

【 調査結果概要 】

地域外の人・団体が関与することで地域活動が活性化または新たに成立した事例を全国から選定し、事務局スタッフが訪問ヒアリングを実施した。最終的に以下の 11 事例について調査・報告を行った。

No.	事例名	所在地・主な特徴
①	ママの HOT ステーション	北海道音更町 移住者×多世代交流
②	高松第三行政区ふるさと地域協議会	岩手県花巻市 農福連携×多団体協働
③	ウルアス（漆の明日を語る会）	鹿児島県姶良市 子ども×高齢者の知恵継承
④	宇川加工所	京都府京丹後市 移住者による地域資源の再発見
⑤	트레이ディングケア	愛知県高浜市 外国人の地域受入れ
⑥	高根コミュニティラボわあら	新潟県村上市 移住者×既存地縁組織
⑦	「結」プロジェクト	三重県鳥羽市 漁業版ワーキングホリデー
⑧	山あげ祭	栃木県那須烏山市 伝統文化×関係人口
⑨	諸沢悶絶マラソン	茨城県常陸大宮市 地域行事による外部参加促進
⑩	久保田青年会	沖縄県沖縄市 若者による地域活性化
⑪	とかの元気村	高知県佐川町 「よそ者」登用と人材育成

ヒアリング対象の選定に際しては、「地域外からの移住者が単独で中心を担っているだけの事例」は対象外とし、地域内外の力の協働・連携が実現している事例を優先的に選定した。

11 の調査事例は「地域外の関わり方」の観点から大きく三つの類型に整理できる。ただし、複数の類型をもつ事例もあるので、完全な分類ではないことに留意願いたい。

●【移住定住型】地域外から移り住んだ人が地域活動の起点となっているタイプ

①ママの HOT ステーション、②高松第三行政区ふるさと地域協議会、③ウルアス、④宇川加工所、⑤トレーディングケア、⑥高根コミュニティラボわあら

●【関係人口・交流型】定住はしないが継続的に地域に関わる人・団体によるタイプ

②高松第三行政区ふるさと地域協議会、⑥高根コミュニティラボわあら（一部）、⑦

「結」プロジェクト、⑧山あげ祭、⑨諸沢悶絶マラソン、⑩久保田青年会

●【組織連携型】外部団体・企業・行政機関との協働で活動が成立しているタイプ

②高松第三行政区ふるさと地域協議会（農水省活用等）⑪とかの元気村

【移住定住型】

① ママのHOT ステーション

北海道音更町や上士幌町など十勝管内では、「ママのHOT ステーション」が、赤ちゃんとママの居場所づくりを起点として、多世代交流や企業連携イベントを展開している。音更町は人口4万人以上、高齢化率約30%の地域であり、人口規模が比較的大きい地域であっても、ゆるやかな関係づくりの必要性があることを示している。活動は、商業施設や公共施設を活用した日常型の居場所づくりと、救急救命講習や公共交通イベントなどのイベント型の取り組みを組み合わせている。

この活動は、大阪から移住した元地域おこし協力隊の実践者が立ち上げたものであり、無印良品、コープ、バス会社、森永乳業など多数の企業が協力・協賛している。受入れの工夫として、代表自身が地域を歩き回って顔を売り、地道にコミュニケーションを重ねてきたことが大きい。また、若者にはSNS、高齢者には新聞や手紙といったように、対象に応じて広報媒体を使い分けている。「赤ちゃん」という存在が、世代や立場を超えて人をつなぐハブとして機能している点も重要である。

その結果、赤ちゃんを介した自然な多世代交流が実現し、高齢者にとっては生きがいや健康への動機づけにもなっている。また、「場所はあるがコミュニティが作れない」という企業側の課題解決にもつながり、地域活性化の新たな接点を生み出している。代表がSCとして活動していた当時は、生活支援体制整備事業など既存制度の枠組みの中では、こうした自由な多世代交流を位置づけにくいという制度上の難しさがあったため、独立・法人化によって対応した。継続には、行政、企業、地域住民を巻き込み、横串を刺すハブ機能を維持すること、そして深入りしすぎない柔軟で気軽なコミュニティを保つことが重要である。他地域への示唆としては、赤ちゃんのように誰もが関わりやすい存在をハブにして、多世代交流と企業課題の解決を同時に進めること、またターゲットに応じて情報発信手段を使い分けることが挙げられる。

② 高松第三行政区ふるさと地域協議会

岩手県花巻市の中山間地域では、高齢化率が40%を超え、公共交通機関もない状況の中で、貸し農園の運営、福祉農園での栽培・加工・販売、高齢者の外出支援、配食・除雪支援など、多面的な地域支援が行われている。農業と福祉を組み合わせられた活動により、高齢者の暮らしを支えつつ、地域の交流や役割づくりにもつなげている。貸し農園

や福祉農園は、作業型と日常型の双方の性格を持つ取り組みである。

地域外の関与としては、移住してきた若者が、貸し農園の広報用の手作りチラシ作成などで力を発揮している。また、岩手県立大学の教員の協力により農業・福祉・交流をテーマにした「ふるさと交流福祉計画」を策定し、農福連携による地域づくりが具体的に動き出した。交流人口は2,600人に達し、移住者が増えたことで結果的に高齢化率が低下している。受入れの工夫として、移住してきたばかりの若者からの自発的な申し出を拒まず、実際の役割を任せている点が挙げられる。活動は、「個人の困ったは、やがて地域の困ったになる」という理念のもとで進められている。

その結果、貸し農園では、地区外の人々だけでなく地元高齢者も半数おり、地区外の人から「先生、教えて」と聞かれて、地元高齢者が「びっくり！」するような地区内外の交流の場となり、福祉農園は生きがいと収入源を生み出している。また、外出支援は公共交通の乏しい地域における生活インフラの一部を担っている。一方で、活動開始から17年が経過し、役員を含む組織の高齢化が進んでいることが課題である。継続には、農業・福祉・交流など多様な団体との協働をさらに進め、全住民参加型の体制を維持するとともに、次世代のプロジェクトチームによる新たなビジョン策定が重要となる。他地域への示唆としては、移住者など若者の自発的提案を拒まず役割を任せること、農業・福祉・交流を連携させて地域全体で支える枠組みをつくることが挙げられる。

③ ウルアス（漆の明日を語る会）

鹿児島県始良市漆地区は、人口197人、高齢化率56.4%の過疎集落であり、山村留学特認校を有している。この地区では、ウルアスが、キャンプやマルシェなどの体験型イベントを通じて、地域の魅力発信や多世代交流の場づくりに取り組んでいる。活動の入口は、ホテルキャンプや極寒キャンプ、マルシェなどのイベント型の関わりにある。

この活動は、祖父母が暮らす漆地区に移住した代表が立ち上げ、特認校に通う地区外の子どもとその親がコアメンバーになっている。さらに、市内の木工工房などとも共催し、地域内外の人を巻き込んでいる。受入れの工夫としては、「よそ者」の視点から、地域にとって当たり前であった自然や高齢者の知恵・技を価値ある資源として捉え直していることが挙げられる。また、地元高齢者をワークショップの講師役にするなど、出番を用意することで巻き込みを進めている。

その結果、マルシェには約500人が来訪するなど外部からの集客につながり、子どもたちは高齢者との交流を通じて成長し、地域にも活気が生まれている。一方で、コアメンバーである小学生の親たちの子どもが卒業した後、組織をどう維持するか、また高齢世代をさらにどう巻き込むかが課題である。継続の条件としては、「自分たちが楽しむこと」を活動の本質に据え、楽しくないと思ったら無理に続けないという姿勢を保つことが重要である。他地域への示唆としては、「よそ者」の視点で地域の「当たり前」を

資源に転換すること、そして子どもをハブにして親や住民を巻き込む方法の有効性が挙げられる。

④ 宇川加工所

京都府京丹後市宇川地区は、人口 1,013 人、高齢化率 50.9%の半農半漁地域であり、「日本の棚田百選」にも選ばれている。この地域では、宇川加工所が、地元食材を用いた加工食品の開発・製造・販売を行うとともに、サロンである金曜喫茶の運営や移動販売車の誘致・支援にも取り組んでいる。活動の拠点は、廃止された保育園を活用した「宇川アクティブライフハウス」であり、加工、交流、買い物支援の複合的な場となっている。

地域外の関与としては、移住者や地区外在住者が会員の約 8 割を占めており、さらに龍谷大学のゼミ生が毎年フィールドワークを続けている。受入れの工夫としては、大学生を「お客さん」として扱わず、地域住民と同じ目線で一緒に汗を流してもらうことが重視されている。また、「地域居酒屋」のような本音で話せる場を設け、認識のズレや遠慮を埋める努力が行われている。「よそ者」が地域に入る際には、まず地域のルールを知り、「飲みニケーション」などで信頼関係を築くことが大切であるという知見が蓄積されている。

その成果として、地元食材の付加価値化、遊休公共施設の有効活用、高齢者の居場所と買い物支援の実現、大学生の成長と関係人口の創出など、複数の効果が生まれている。一方で、学生など外部人材の「覚悟」や認識のズレ、予定をこなすだけの短期的関わりで終わってしまうケースへの対応が課題となっている。継続には、従来どおり自己資金で運営し、無理に儲けを追求せず会員に還元する仕組みを維持するとともに、時間をかけて中長期的な信頼関係を築くことが必要である。他地域への示唆としては、外部人材を対等な仲間として扱うこと、遊休施設を地域と交渉しながら活動拠点へと転換することの重要性が挙げられる。

⑤ トレイディングケア

愛知県高浜市は、面積の狭いコンパクトな市である。この地域では、外国人介護技能実習生、特にインドネシアからの実習生の受け入れと、多文化共生コミュニティセンター等の運営を軸とした「トレイディングケア」が展開されている。活動の中心は、コミュニティセンター、サロン、日本語教室などの日常的な交流と支援の場であり、多文化共生を地域の日常の中に位置づけようとする取り組みである。

地域外の関与としては、インドネシアからの技能実習生、多様な国籍の外国人住民、さらには入国管理局や JICA との連携が挙げられる。当初は、地域住民が外国人材を 1 対 1 で支える固定的な「バディ制度」を導入していたが、相性の問題や気疲れが生じたため、現在は特定のペアに固定せず、「ゆるくつながる」「強制しない」形へと見直され

ている。また、サロンや日本語教室などを分けずに「ごちゃまぜ」にし、多世代・多国籍が自然に交流・相談できる場に行っていることも大きな工夫である。

その結果、技能実習生の孤立防止や地域への定着が進み、「ここは日本の私の家である」と感じられる安心感が生まれている。同時に、地域の子どもや高齢者にとっても、多文化理解を深めたり、役割や生きがいを得たりする機会となっている。課題としては、当初の1対1バディ制度における相性の問題や気疲れがあったが、制度変更によって一定の対応が図られている。継続に当たっては、送り出し機関と連携した厳格な実習生の選考によって質を担保するとともに、地域住民とのゆるやかなつながりを維持していくことが重要である。他地域への示唆としては、支援する側・される側という枠組みを越え、誰もがごちゃまぜに関われる「ゆるやかなつながり」の場を設計することの有効性が挙げられる。

⑥ 高根コミュニティラボわあら

新潟県村上市高根集落は、人口約500人、高齢化率約50%、林業を主産業とする中山間地である。この集落では、高根コミュニティラボ・わあらが、ゲストハウス運営、高齢者の居場所づくり、子ども向け夏ゼミ、若者向けイベント、さらには水害時のボランティアセンター運営など、多世代の活躍の場をつくっている。活動は、高齢者の居場所づくりのような日常型の取り組みと、夏ゼミやハロウィン、居酒屋企画などのイベント型の取り組みを組み合わせで展開されている。

この活動の中心には、移住者夫妻がいる。彼らが若手・中堅主体の組織を立ち上げ、高根集落で地域活動を活発に行っていた「高根フロンティアクラブ」の付き合いをひきついでいる大学生、企業社員、新たに総合病院の研修医など、地域外の人材とも協力関係を築いてきた。空き家を改修した拠点「瑞泉閣」が日常的な媒介の場となっており、飲み会などで気軽に企画を出し合える関係が、活動の柔軟さを支えている。また、親世代が担ってきた既存組織とは対立するのではなく、事務局を兼ねるパイプ役を通じて「阿吽の呼吸」で連携している。若手が活動しやすいよう、既存組織とは別に若手・中堅主体の組織を立ち上げた点も重要な工夫である。

その結果、地域では笑顔が増え、若手や子どもたちの郷土愛が育まれている。また、平時から築いてきた外部との多様なネットワークが、水害時の迅速な支援にもつながった。一方で、メンバーは本業を持っており、これ以上の事業規模の拡大は難しいという現実がある。このため、専従を置かず、収入確保のために無理な拡大をせず、「できる人が、できるときに、できるだけ」「無理なく・楽しく」を維持することが継続の条件となる。他地域への示唆としては、義務感よりも楽しさを活動の中心に据えつつ、親世代組織と若手組織を分けながら、両者をつなぐ仕組みを用意することの有効性が示されている。

【関係人口・交流型】

⑦ 「結」プロジェクト

三重県鳥羽市答志島和具集落は、人口 358 人、高齢化率 45.5%の離島集落である。この地域では、ワカメの収穫期における加工作業を支える「漁業版ワーキングホリデー」として、結プロジェクトが行われている。都市部の高齢者や学生などがボランティアとして参加し、ワカメ漁の繁忙期の人手不足を補っている。活動の入口は、ワカメの加工作業という明確な作業型の関わりにある。

地域外の関与としては、都市部の高齢者や学生などが県内外から参加しており、1日平均 8.4 人、リピーターは 7 割を超えている。事務局長は「よそ者」の立場から、漁家とボランティアをフラットにマッチングしている。受入れに当たっては、当初の一般公募をやめ、口コミや紹介に限定することで、意欲の高い参加者を確保している。また、宿泊先を漁家ではなく旅館等に設定し、双方に離れる時間をつくることで、適度な距離感を保っている。作業後の交流会も、関係づくりと継続参加を支える場として機能している。

その結果、ワカメ漁の人手不足が解消されるだけでなく、ボランティアと漁家の交流や地域の活性化にもつながっている。さらに、参加者からの提案によってマリンエコラベル取得などのブランド化が進展したことは、外部の視点が地域に新たな価値をもたらす例といえる。課題としては、過去に観光目的で労働意欲の低い参加者が来たことがあったが、公募の中止によって対応している。継続には、口コミによる質の高いボランティアの確保と、現在の受入れ適正レベルの維持が不可欠である。他地域への示唆としては、しがらみのない「よそ者」がマッチングのハブ役となることの有効性と、受入側・参加側が四六時中一緒にいないような距離感の設計の重要性が挙げられる。

⑧ 山あげ祭

栃木県那須烏山市は、人口約 2.3 万人、高齢化率 40.4%の地域であり、中心市街地の 6 町が連携して、460 年の伝統を持つ国重要無形民俗文化財「山あげ祭」を運営している。祭りでは、野外歌舞伎舞踊の舞台設営などを各町の「若衆団」が担っており、地域の伝統文化の継承と地域活動の中核となっている。祭りへの関わりは、準備や設営作業を通じた作業型の要素と、祭礼そのものに参加するイベント型の要素の両方を持つ。

現在、若衆団には町外・市外・県外在住者も多数参加している。友人・知人・職場のツテに加え、市の広報による公募や企業からのボランティア派遣など、多様な経路を通じて担い手を確保している。かつては「長男限定」「地元在住限定」といった厳しい制限があったが、現在はそうした条件を撤廃し、広く参加を受け入れている。「よそ者」に対しても壁をつくらず、仲間として迎え入れる姿勢が、祭りの継続を支えている。

その成果として、人手不足を補いながら祭りを継続できているだけでなく、多世代交流や地域の人材育成、礼儀作法や連帯感の醸成にもつながっている。他方で、若衆、特に世話人の負担は大きく、仕事や家庭との両立の難しさ、寄付金集めの困難さ、酷暑下での開催リスクが課題である。このため、サラリーマンでも参加しやすいよう土日中心の体制に見直すこと、時代に応じて柔軟にルールをアップデートすること、広域からの人材確保に向けてPRを強化することを求める声もあがっている。他地域への示唆としては、伝統行事であっても「来る者拒まず」の姿勢で担い手を受け入れ、時代や生活様式に合わせて運営のあり方を柔軟に見直していくことの重要性が示されている。

⑨ 諸沢悶絶マラソン

茨城県常陸大宮市諸沢地区は、人口 297 人、高齢化率 59.9%の中山間地域である。この地区では、住民有志による「よい取りの会」が、耕作放棄地等の環境整備に取り組んでいる。これに加えて、地域外の個人が主宰するトレイルラン大会「諸沢悶絶マラソン」の運営を地域が支えることで、地域内外の交流の場が形成されてきた。活動の入口は、草刈りやコース整備といった作業型の関わりと、トレイルラン大会というイベント型の関わりの双方にある。

地域外の関与としては、移住者が「よい取りの会」の事務局長を担い、市外在住の愛好者が大会を主宰している点が特徴である。大会には県内外から約 80 人のランナーが参加しており、諸沢地区は年に一度、外部の人々と出会う場となっている。こうした関係を支えているのは、「よそ者」である事務局長が、同じく「よそ者」である大会主宰者とフラットにつながり、地域と外部の間を調整する媒介役を果たしていることである。また、住民が自発的に私設エイドステーションを設け、ランナーをもてなしていることも、この地区ならではの受入れの工夫といえる。

その結果、トレイルラン大会を通じて、高齢者を含む住民の活躍と交流の場が生まれ、地域に大きな活気もたらされている。一方で、住民のさらなる高齢化に伴い、「よい取りの会」の存続や大会を支える地元サポート体制の維持には懸念がある。このため、定員 80 人程度、年 1 回という現在の適正規模を維持しつつ、無理のない地元支援体制を継続していくことが重要な条件となっている。他地域への示唆としては、移住者がハブ役となって外からの提案を地域に接続すること、また高齢者を「支えられる側」ではなく「もてなす側」として巻き込み、活躍の場をつくることの有効性が挙げられる。

⑩ 久保田青年会

沖縄県沖縄市久保田地区は、人口 2,043 人、高齢化率 27.2%の地域である。この地区では、久保田青年会が、郷土芸能であるエイサーの継承と公演を中心に活動しつつ、高齢者宅の生活支援、道路清掃、自治会行事の人的・資金的サポートも担っている。活動の入口は、エイサーの練習や公演というイベント型の関わりと、ボランティア活動とい

う作業型の関わりの双方にある。

特徴的なのは、会員約 60 人のうち約 9 割が地区外在住者であり、歴代会長も 17 代目から現在の 19 代目までは地区外在住者となっている。受入れに当たっては、「来る者拒まず」の完全オープンな姿勢を貫き、地区外の人も「久保田の仲間」として分け隔てなく接している。エイサーという魅力的なコンテンツに加え、SNS や YouTube、口コミなどが新たな参加者を呼び込んでいる。過去には二度解散した経験もあるが、その後、地区外から広く人材を受け入れることで継続してきた。

その結果、エイサーの継承と公演収入の確保が可能となり、その収益が自治会行事等の財源にもなっている。また、若者にとっての居場所づくりや社会教育の場として機能し、世代間・地域間の交流、「ゆいまーる（支え合い、相互扶助）」の実践にもつながっている。一方で、役員、特に会長の負担や、活動方針を巡る会員同士の意見調整も課題である。継続には、エイサーの質を維持しながら、伝統を守りつつも現代の若者の感覚に合わせて柔軟に変化していく姿勢が求められる。他地域への示唆としては、「来る者拒まず」のオープンな受入れと、地域で役割を果たして感謝される経験が、地域社会への帰属意識や自己肯定感、自発性を生み出すことが挙げられる。

【組織連携型】

⑪ とかの元気村

高知県佐川町斗賀野地区は、人口 2,999 人、高齢化率 40.8%の農業を基幹産業とする地域である。この地域では、「NPO 法人とかの元気村」が集落活動センターやあったかふれあい※の指定管理・運営を担い、草刈りや「わかもの交流会」「お助け大作戦」などのイベントを開催している。活動は、草刈りなどの作業型、交流会や秋まつりなどのイベント型、そして日常的なあったかふれあいセンターの運営という日常型の三つを組み合わせている。

地域外の関与としては、移住者や元地域おこし協力隊が役員・会員として多数活躍しており、役員 15 人のうち 7 人が移住者等である。また、県の関係人口創出プロジェクト参加者も受け入れている。受入れの工夫として、あらゆるイベントを「人材発掘の場」と位置づけ、率先して行動する「よそ者」や若者を積極的に勧誘していることが挙げられる。さらに、作業後に慰労会を行うなど、フラットな関係性を築く工夫をしている。

この結果、移住者を中心とした若手の役員・会員の登用によって組織の若返りが進み、持続可能性の向上につながっている。また、多世代交流や高齢者の居場所づくりにも寄与している。課題としては、行政主導の関係人口創出プロジェクトなどに参加した一過性の来訪者を、いかにリピーターや関係人口へとつなげるかが挙げられる。継続には、「何かやったら飲む、楽しくやろう」という楽しさを本質に据えた活動を維

持し、地域全体を社会教育の場として捉える意識を持ち続けることが重要である。他地域への示唆としては、イベントを単発で終わらせず、人材発掘の場として位置づけ、参加者の様子を観察しながら次の役割へ巻き込んでいく戦略の有効性が示されている。

※集落活動センターとは、高知県で行われている、地域住民が主体となって、地域の課題やニーズに応じて、生活、福祉、産業、防災といった様々な活動に総合的に取り組む仕組みのこと。内閣府の推進する「小さな拠点」の代表例としても知られる。あったかふれあいセンターとは、年齢や障害の有無にかかわらず、誰もが気軽に集い、必要なサービスを受けることができる高知県独自の地域共生社会の小規模多機能支援拠点。ともに、2012年度（平成24年度）より開始されている。

以上のヒアリング事例から、若者や移住者が地域活動に積極的に参加する共通する工夫やマインドセットを9つ抽出してみた。

1. 義務感ではなく「楽しむ」ことと「無理をしない」体制づくり
2. ライフスタイルに合わせた「負担軽減」と「ゆるいつながり」
3. 「よそ者」を「来る者拒まず」で受け入れるオープンな風土
4. 「よそ者」を対等に扱い、時には重要な調整役に抜擢する
5. 「交流イベント」を入り口とした段階的な巻き込み
6. それぞれが得意なことを生かせる「役割（出番）」と達成感
7. 「苦労」を乗り越えた先の強烈な「達成感」の共有
8. 若手や移住者が主導しやすい「新しいプラットフォーム」の創出
9. 多様な属性が交ざり合う場づくり

それぞれの項目について、調査事例を見てみよう。

1. 義務感ではなく「楽しむ」ことと「無理をしない」体制づくり
活動を継続・活性化させる最大の原動力は「楽しさ」である。
 - ・無理をしない：新潟県村上市の高根集落では、「関わる人たちがみんな楽しむ」「無理をしない」「できる人が、できるときに、できるだけのことをやる」という方針で活動しており、義務感や負担感を持たせない工夫をしている。愛知県高浜市の技能実習生と地域住民をつなぐトレイディングケアの「バディシステム」でも、特定のペアを作って1対1で対応する形から、決まったペアを作らず「ゆるくつながる」「強制しない」「無理はしない」形式に変更したことで、うまく機能するようになった。
 - ・楽しむ：とかの元気村では、「何かやったら飲む、飲みながら楽しくやろう」という姿勢が根付いており、草刈りなどの作業後に行われる慰労会（飲み会やバーベキュー

一) が参加者の大きな楽しみになっている。沖縄市の久保田青年会でも、活動は大変な部分もあるものの、仲間と一緒に活動することや一緒に過ごす時間が楽しいという声が上がっている。ウルアス（漆の明日を語る会）でも、活動の本質は「楽しむこと」であり、楽しくないと思ったらやめるというスタンスで活動している。

2. ライフスタイルに合わせた「負担軽減」と「ゆるいつながり」

現代の働き方や参加者の心理的ハードルを下げる工夫が、継続的な参加の鍵となっている。

- ・ 無理のない距離感の維持：愛知県高浜市の外国人技能実習生と住民をつなぐ「バディシステム」では、当初の1対1のペア制から相性や負担の問題が生じたため、「決まったペアを作らない」「ゆるくつながる」「強制しない」「無理はしない」という方針に変更し、うまく機能するようになった。三重県鳥羽市答志島の漁業ボランティア（結プロジェクト）でも、参加者の宿泊先をあえて受け入れ先の漁家ではなく島内の旅館等にするすることで、双方に離れる時間を作り負担感を減らしている。
- ・ 現代の働き方への適合：栃木県那須烏山市の山あげ祭では、かつては地元商工業者が中心であったが、現在は若衆（担い手）の多くがサラリーマンだ。そのため、平日の頻繁な会合や作業が大きな負担となっており、今後は集まりを土日に限定するなど、現代の働き方に合わせた体制の見直しや配慮が不可欠だと指摘されている。

3. 「よそ者」を「来る者拒まず」で受け入れるオープンな風土

地元出身者かどうかにこだわらず、外部の人を快く仲間として迎え入れる姿勢が不可欠だ。

- ・ 来る者拒まず：沖縄市の久保田青年会は、「来る者は拒まず、去る者は追わず」の姿勢で市外や県外からの参加者も広く受け入れており、「よそ者」であっても「入ったら地元の人」として扱われる。山あげ祭でも、地元か「よそ者」かに関係なくあらゆるつながりを使って人を集めており、地元の住民も「よそ者」が伝統の担い手になってくれることに感謝している。
- ・ 積極的な声かけ：とかの元気村では、よそから来た人に対して積極的に声をかけ、自分たちの活動に加わってほしいと歓迎する風土があり、現在活躍している役員の多くが移住者だ。茨城県常陸大宮市（諸沢地区）でも、「よそ者」のアイデアに耳を傾け、その実現に積極的に協力する懐の深さがある。

4. 「よそ者」を対等に扱い、時には重要な調整役に抜擢する

外部の人材を「お手伝い」や「下位の者」として扱うのではなく、地域の重要な戦力として対等に受け入れている。

- ・ 立場の壁をなくす：山あげ祭では、かつては「入り婿」や「よそ者」を格下として扱う時代もあった。しかし現在は、人手不足を背景に地元出身かどうかにかかわらず、知人のツテや公募で集まった市外・県外の人材も「ウェルカム」な姿勢で歓迎し、仲間として対等に接して祭の重要な役割を任せている。
- ・ 「よそ者」だからこそその強みを生かす：答志島の結プロジェクトでは、漁家とボランティアのマッチングというデリケートな役割を、実証実験から関わっている「よそ者（外部の参加者）」に任せている。地元住民ではない第三者が間に入ることで、集落内での不満や文句が出にくくなるというメリットを生み出している。

5. 「交流イベント」を入り口とした段階的な巻き込み

- いきなり重い役員などを任せるのではなく、誰もが気軽に参加できる場を設けている。
- ・ とかの元気村では、焼き肉パーティー（わかもの交流会）や運動会など、参加しやすい行事を「入り口」として用意している。そこで親睦を深めつつ、周囲への気配りなどができる「いい動きをしている人（率先して行動する人）」を見つけ、次の活動に「手伝って」と誘うという形での人材発掘が行われている。
- ・ ウルアス（漆の明日を語る会）では、ホテルキャンプやマルシェなどのオープンイベントを開催し、まずは地元の人もよその人も一緒に漆の自然や文化を楽しみ、漆のファンになってもらうことを目指している。

6. それぞれが得意なことを生かせる「役割（出番）」と達成感

- 人に必要とされ、活躍できる場があることが、参加への強いモチベーションになる。
- ・ ウルアス（漆の明日を語る会）のマルシェやキャンプでは、子どもが自分でお店を出したり、地元のお年寄りがわら細工のワークショップで講師を務めたりと、子どもから高齢者までが自分の得意なことで役割を持って参加できる仕組みを作っている。
- ・ とかの元気村では、「手伝って」と声をかけられること、そして人のために役立ち「ありがとう」と言われることが、世代を問わず大きな生きがいになっている。
- ・ 諸沢悶絶マラソンでも、住民が自主的にエイドステーション（給水所）を設けたり、沿道でランナーを応援したりすることで、ランナーをもてなすという役割を果たし、双方の交流を楽しんでいる。また、那須烏山市の山あげ祭のような伝統行事や沖縄市の郷土芸能エイサーなどの活動をやり遂げた後に仲間と共有する「達成感」も、若者を強く惹きつける要因となっている。

7. 「苦勞」を乗り越えた先の強烈な「達成感」の共有
活動自体が過酷であっても、それを仲間とやり遂げることが強い絆や定着を生み出す。
 - ・ 那須烏山市の山あげ祭では、猛暑のなか重量物を扱いながら舞台を設営・解体するという厳しい作業を伴うが、それらをやり遂げた後には、大人同士が涙を流して抱き合うほどの強烈な達成感と喜びが得られる。
 - ・ 「結」プロジェクトのワカメ収穫ボランティアでも、浜での加工作業は厳しいものの、達成感ややりがいが大きく、作業後の交流会での対話も相まって、参加者にとって島が「第2の故郷」のような存在となり、リピーターの獲得につながっている。

8. 若手や移住者が主導しやすい「新しいプラットフォーム」の創出
既存の組織のしがらみにとらわれず、新しい発想で動ける環境を作ることも有効。
 - ・ 高根コミュニティラボわあらでは、親世代が運営する既存の組織には若手が参加しづらいという課題があった。そこで、若手～中堅が主体となって活動できる別団体（わあら）を立ち上げ、会議よりも飲み会の場で企画を決めるなど、自分たちのライフスタイルに合ったやり方で活動している。
 - ・ ウルアス（漆の明日を語る会）でも、移住者の母親が地元のPTAに声をかけ、子どもとその親による有志の団体（ウルアス）を立ち上げた。移住者ならではの視点で地域の魅力（お宝）を再発見し、新しい体験型イベントを創出している。

9. 多様な属性が交ざり合う場づくり
特定の対象者に絞らず、多様な人が集まるプラットフォームを作ることが、新たな役割や参加のきっかけを生んでいる。
 - ・ 高松第三行政区ふるさと地域協議会では、遊休農地を「福祉農園」として整備し、地元高齢者、移住者、障がい者、子どもたちが一緒に農作業をする場を作った。一人で畑仕事をするよりも会話や交流ができる場になったことで、移住者やUターン者が地区の消防団や神楽の後継者などの貴重な人材として活躍する土壌になっている。
 - ・ トレイディングケアでも、外国人向けの日本語教室や生活相談、地域の日本人向けのサロンなどをあえて「事業を全部ごちゃまぜにする」ことで、参加者が自然に交流し、雑談の中から生活支援のニーズを拾い上げるといったプラスアルファの効果を生み出している。

第3章

オンライン全国フォーラム開催

本事業の一環として、地域外の人材、団体、資源と協働した持続可能な地域づくりを考えるフォーラムをオンラインにて開催した。

フォーラムの企画・プログラムは、それまでの研究委員会での議論などを参考に、事務局が原案作成のうえ、委員会で討議し決定した。

以下、フォーラムの概要を記す。

※ フォーラムの告知チラシと当日資料は、本報告書参考資料 45 頁以降に掲載

【 フォーラム概要 】

- タイトル 『地域外の力を活かす ～ 地域の協働力の磨き方～ 』
- 開催日時 2026年 2月12日（木） 13:30～16:30
- ZOOM（ウェビナー）利用
- 対象 生活支援体制整備事業担当者、SCを想定
※ ただし、参加者限定はしていない
- 告知方法 全国自治体に対するDM案内
法人HP、メールマガジン等での開催案内
研究委員会メンバーのSNSによる告知協力
昨年度先行事業フォーラム参加者へのメール告知
生活支援共創プラットフォーム（全国版）専用ホームページでの周知
- 参加申し込み 441人（申込グループ数317）
- 当日アクセス ピーク350弱



【 プログラム 】

- 開会挨拶
- 基調対談「地域外の力との協働と可能性」
 - 【発表者】都岐沙羅パートナーズセンター 事務局長 斎藤 主税
 - 【コーディネーター】兵庫県立大学 環境人間学部 教授 竹端 寛
- セッション「使えるものは、何でも使おう！地域の外にも目を向けて」
 - 【発表者】株式会社 ママのHOTステーション 代表取締役 倉嶋 香菜子
 - 【発表者】花巻市高松第三行政区ふるさと地域協議会 事務局長 熊谷 哲周
 - 【発表者】一般社団法人 高根コミュニティラボわあら 事務局長 能登谷 愛貴
 - 【コメンテーター】厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課
地域づくり推進室 室長補佐 佐藤 清和
 - 【コメンテーター】栃木県社会福祉協議会 地域福祉・ボランティア課
課長補佐 桧原 賢一
 - 【コメンテーター】高知県 長寿社会課 介護予防・地域支援室 室長 窪田 純子
 - 【コメンテーター】沖縄県 本部町 子育て支援課 牧田 健太郎
 - 【コメンテーター】NPO法人 全国コミュニティサポートセンター 理事長 池田 昌弘
 - 【コーディネーター】東北福祉大学 総合福祉学部 教授 高橋 誠一
- 閉会

◎フォーラムの当日資料は、本報告書参考資料 47 頁以降に掲載

【 企画背景となる問題意識 】

- 現在の生活支援体制整備事業は、昔に比べ弱まっているとはいえ、地域の支え合いがある程度あることを前提に、それを支援・強化し、地域生活を維持・充実させることを目的としている。
 - ※SC は、別名・地域支え合い推進員※
- 一方、人口減少や共働きが一般的になったことなどライフスタイルの変化による地域の担い手不足という課題は存在し、このような状況下、地域内の資源のみならず地域外の資源や、新たな視点を持つ外部人材「よそもの」との協働を視野に入れることは、極めて重要と考えられる。
- 特に、資源・人材ともに限られる大都市以外の地域では、SC 自身が、担当地区外の資源も視野に入れておくことは、地区内の支援を行ううえで、必須である。
- また、職務範囲が広い割に個人に任されている部分が多く、抱え込み、孤立しやすいと言われる SC に、外部の知恵や力を借りる（借りていい）という選択肢を提示することも、燃え尽きを防止するうえで重要と考えられる。

【 プログラム意図 】

●基調対談（導入）

- ・ SC や生活支援体制整備関係者に対し、自身の地区外の資源・企業・人材等との協働の意義、その視点を日頃からもっておくことの大切さを伝える。視野の拡大を促す。
- ・ 生活支援体制整備のベースにある「地域」にとって、域外との交流・協働がもたらす可能性を提示し、地域が活性化することが、生活支援体制整備（高齢者の介護予防や生活、活躍の場づくり）にとっても良い影響を与えることを意識してもらう。
（地域づくりと生活支援体制整備は密接に関連していることの再認識）
- ・ 地域づくりを考えると、①狭い「地域（エリア）」を超えて考えようという意味に加え、②狭い分野（高齢者支援という分野、福祉という分野）を超えて考えることも重要というメッセージを送る。
- ・ 上記の狙いを、対談を通して示していく。次のセッションの事例発表が「エリアを超えている」、「分野を超えている」ことへの理解を促す導入とする。
- ・ 中間支援団体は地域によっては存在せず、生活支援体制整備関係者でもよく知らない人が多いことから、中間支援団体（地域づくり系）の活動の一端を理解してもらう。

●セッション 『使えるものは、何でも使おう！地域の外にも目を向けて』

- ① 外部の力を取り入れて、地域の活動を活性化している具体的な取り組みの紹介
- ② 地域（エリア）を超えた協働を示すとともに、単なる高齢者福祉（高齢者だけを支援する）ではない高齢者を含んだ地域を支援している（分野を超えている）視点を提示する。
- ③ 単に地域に不足している人手を補う・専門性を補うだけでなく、外部との交流自体が活動参加者（地域の人）により刺激・影響を与えていることを理解してもらう。
 - ・ 高齢者は支援されるだけの存在ではないという再認識、活躍の場の創出
 - ・ 世代間の交流・地域間の交流の仕掛けの実際
 - ・ 生活支援体制整備事業は、「高齢者だけ」の参加の場を提供するものではなく、多世代交流・地域間交流が可能な仕掛けを積極的に取り組むべき

<株式会社 ママの HOT ステーション代表取締役・倉嶋香菜子氏>

- ・ 子育てでママへの支援に高齢者が活躍。ママには「頼っていいんだ」という意識。高齢者には、子ども（孫世代）との触れ合いの機会・他者への役立ち感。
- ・ 「地域貢献（CSR 含）」をもとに、域外企業を巻き込む方法

- ・ 広域化への仕掛け

<花巻市高松第三行政区ふるさと地域協議会 事務局長・熊谷哲周氏>

- ・ 地域福祉計画づくりにおける大学の先生の協力
- ・ 外部コンサルのアドバイス
- ・ 外部からの移住者増加による地域の活性化（消防団や地域の担い手の若返りほか）
- ・ 外部の力を導入する際の、地域での意思決定・覚悟の重要性。

<一般社団法人 高根コミュニティラボわあら事務局長・能登谷愛貴氏>

- ・ 人口増加が見込めないなか、意図的に「人交密度」を増やす仕掛け。
- ・ 若い世代が楽しみながら、無理なく、地域活動を行う新しい形。持続的な活動の理由のひとつ。楽しまないと続かない。

【 参加者からの評価 】 ～参加者アンケートから～

フォーラム参加者に、ZOOM 機能によりフォーラム退出時に回答依頼をする形式の参加者アンケートを実施した。最終的に190人より回答を得ることができた。

設問は4つ。

Q1. 回答者の職種

Q2. 評価 (5点満点)

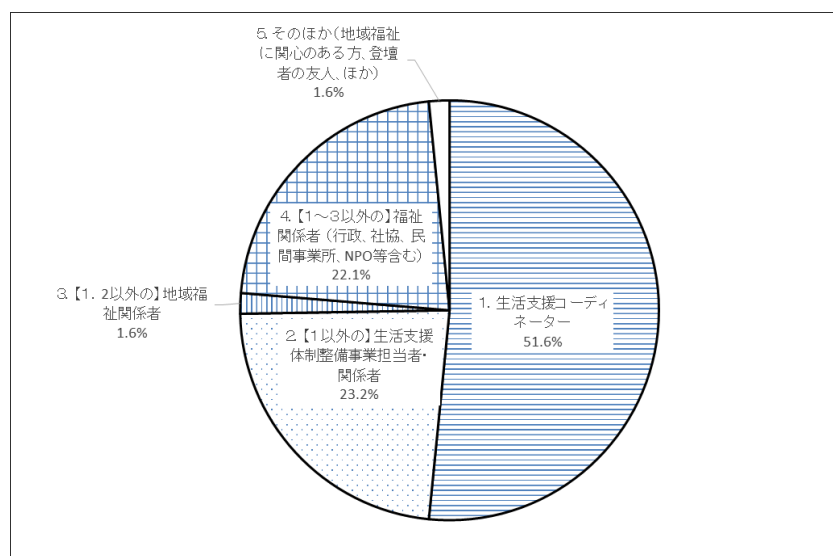
Q3. フォーラムの良かった点、印象に残った点 (自由記述)

Q4. フォーラムの改善してほしい点、もっと深めたいテーマや話題 (自由記述)

アンケート結果をもとに、今回フォーラムを振り返る。

① 参加者 (回答者) 職種 (Q1)

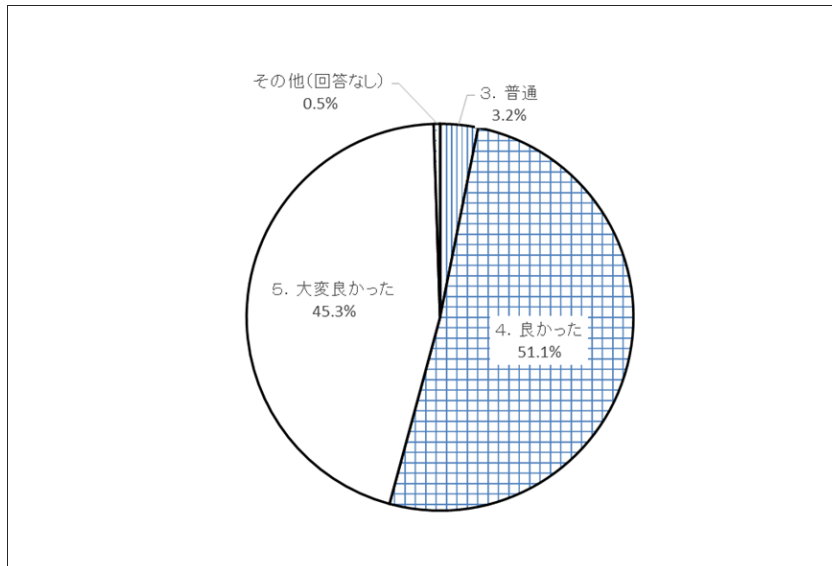
- 最も多かったのは、「生活支援コーディネーター」(51.6%)で、「生活支援体制整備事業担当者・関係者」(23.2%)と併せて、7割以上が生活支援体制整備事業関係者であった。
- 福祉関係も多数を占めるが、珍しいところでは、困窮者自立相談支援窓口担当が参加 (アンケート記述より判明)。



参加者	今回		前回	
	回答数	%	回答数	%
生活支援コーディネーター	98	51.6%	128	49.4%
生活支援体制整備事業担当者・関係者	44	23.2%	70	27.0%
地域福祉関係者	3	1.6%	4	1.5%
ほか福祉関係者	42	22.1%	55	21.2%
その他	3	1.6%	2	0.8%
計	190	100.0%	259	100.0%

② 評価 (Q2)

- 5点満点として評点をつけていただいたが、「大変良かった(5点)」(45.3%)と「良かった(4点)」(51.1%)で96.4%を占めた。
- 不満層(良くなかった)はゼロだった。



評点 (5点評価)	今回		前回	
	回答数	%	回答数	%
1. 大変良くなかった	0	0.0%	0	0.0%
2. 良くなかった	0	0.0%	1	0.4%
3. 普通	6	3.2%	12	4.6%
4. 良かった	97	51.1%	127	49.0%
5. 大変良かった	86	45.3%	119	45.9%
その他(回答なし)	1	0.5%		
計	190	100.0%	259	100.0%
平均評点	4.40		4.41	

③ 良かった点、印象に残った点 ※Q3全回答は、後掲

基調対談、セッションそれぞれに面白かった、参考になったという意見が寄せられた。様々な活動事例の報告を通じ、地域との関係性やつながりの重要性を再認識したという声とともに、高齢者だけの支援という狭い視野に囚われない、多世代交流の中の高齢者や、福祉分野外との協働で地域・高齢者の環境を創っていくという企画意図に通じる感想が多く見られた。

＜フォーラム全体に関する声＞

「主体が SC だけ、行政だけではなくて、多様な主体が関わる例を聞くことができたこと」

「多世代を巻き込んで取り組むことが大切。まず「高齢者」をターゲットとして考えるだけでなく、こども・ママそれ以外の世代から始めることも一つなんだと気づいた」「困りごと」というより「しんどくなってきたこと」と言ったほうが議論が深まること。入り口は高齢者の課題として入る必要はなく、様々な話題をいかに高齢者に当てはめていくかという視点で考えられていること」

「生活支援体制整備事業は高齢者だけのものではない。高齢者だけでなく多世代が楽しく元気に暮らせる地域づくりが重要であることが、当フォーラム全体を通して分かりやすく解説されていて良かった」

「福祉の視点だけでなく広く見ること」という考え方」

「各地域の魅力的な活動の様子を知ることができ勉強になったのとともに、登壇者の皆様からパワーをいただけた研修会でした。直接従事する立場ではなく、委託元という立場の難しさを感じていますが、まずは SC さんとの目線合わせを根気強く行い、良い関係性で一緒に協力していきたいと思います。」

＜基調対談「地域外の力との協働と可能性」に関する声＞

「前段の基調対談が印象的でした。地域住民が納得するデータの活用、ついでにやる・まとめてやるの掛け算、人交密度を高める、分野横断、など。地域福祉を広く俯瞰してみる良い機会でした。齋藤さんと竹端先生のテンポの良い掛け合いも良かったです」

「基調対談での、各事業が同様の施策展開をすることで住民に負担を強いている話が印象的でした。その整理は地域主体で始めたほうが現実的だという話があり、今後の参考になりました」

「地域を動かすのは個人（SC）ではなく「チーム」（行政・SC・地域住民）で協働して作り上げる。」「それぞれの得意分野を活かして役割を明確にする。」「行政が描く整備事業と SC の活動がマッチングしていないといけない。」等もう一度これまでの動きや考え方などを見直す必要があると思いました」

「基調講演の中であった、「やる側ファースト」という言葉が印象的でした」

＜セッション「使えるものは、何でも使おう！地域の外にも目を向けて」に関する声＞

「地域の状況が変わっているのに、活動や事業のやり方が変わっていないので、やる側ファーストにしていく、次の世代に引き継いでいくためには変えることが必要。また、どのように協働していくかのヒントをもらえた気がします。セッションの3つの発表事例も大変参考になりました。住民側の声をよく聞いて活動に繋げて取り組まれている事が印象に残りました」

「住民側の声をよく聞き、活動に繋げて取り組まれている事が印象に残りました」
「農業・福祉・交流で地域が元気になる事例は、移住者と地域住民が貴重な人材として活躍しているという力強い報告でした」
「能登谷さんの若い世代へのアプローチ（取組み）が参考になりました」
「どの事例でも、自然と多世代交流できるような仕掛け作りがあり、今後の事業運営の参考にしたい」

地域も取り組み方も違うが、地域ぐるみでの持続的な地域づくりの事例を紹介し、さまざまな視点を共有した。セッション終了後、前回フォーラムで要望のあった Q&A を取り入れ、フォーラム開始後に参加者から質問を募り、登壇者がそれに回答する時間を設けた。

④ 改善してほしい点、もっと深めたいテーマや話題 ※Q4 全回答は、後掲

- ・ 時間配分と進行の工夫
内容が非常に濃く、「時間が足りない」「もっと深掘りして聞きたかった」という意見が多かった。
- ・ 事例の多様性（都市部・失敗事例）
紹介事例が中山間地域や町村部に偏っていたため、大規模自治体や都市部での展開・工夫についての事例を求める声があった。また、成功事例だけでなく、そこに至るまでの失敗談なども聞きたいというニーズが示された。
- ・ 具体的な手法や制度の深掘り
若い世代を巻き込むための具体的な声掛けの方法や、企業・他分野（農業等）との具体的な連携プロセス、改正地域支援事業の運用ノウハウについてさらに詳しく知りたいという要望が挙げられた
- ・ 登壇者・コメンテーターの議論の深化
コメンテーターの発言時間を増やし、異なる立場の専門家同士による本音の対談や意見交換をもっと聞きたかったという意見が見られた。

問3. 本フォーラムで良かった点、印象に残った点を教えてください (1/6)

視野の狭さに気付かされました

前段の基調対談が印象的でした。地域住民が納得するデータの活用、ついでにやる・まとめてやるの掛け算、人交密度を高める、分野横断、など。地域福祉を広く俯瞰してみる良い機会でした。齋藤さんと竹端先生のテンポの良い掛け合いも良かったです。急な対応があり途中退室をお許しください。皆様のご活躍をお祈り申し上げます。私も頑張ります。

皆さんの具体的な事例紹介

それぞれの地域とのつながりの工夫や実践が背中を押してくれそうです。

基調対談での、各事業が同様の施策展開をすることで住民に負担を強いている話が印象的でした。その整理は地域主体で始めたほうが現実的だという話があり、今後の参考になりました。

主体がSCだけ、行政だけではなくて、多様な主体が関わる例を聞くことができたこと。

基調対談の講話がよかったです。

生活支援体制整備事業と地域福祉の関係が見えた

自分が楽しむことを第一に考える

子育て世代や様々な地域の方との取り組みを知れて良かった

3人の実践報告とデータで地域を考えていく視点。

いきいきと発表されていました。

子育て世代との連動や繋がり大事ですね

具体的な事例の紹介

地域の担い手の状況を、数値を用いて解像度を上げて検証する必要性を認識できたこと

とても参考になるお話がたくさん聞けて良かったです

民間企業との連携が地域の繋がり支え合いに繋がること

高齢者に着目されやすい事業ですが、地域づくりにおいては多世代の交流は欠かせないと改めて感じました。

高齢者に特化した地域課題に着目するのではなく、地域の強みを生かしてつながりをつくるのが大切だと感じた

すべてが参考になりました。高齢者のみに凝り固まっても進まないと思いました。

実践事例を聞いた点

福祉分野だからといって社会資源を福祉に絞らず、福祉外の力（企業、農業など）を活用して掛け算しながら地域を作っていくという視点が大切と感じた。

どの活動も色々な要素が含まれる。とても広大な活動で感動しました。

地域外のいろいろな力を様々に活用されている点は素晴らしいと思った。また今後もお話を伺いたいです。

多様な取り組みを聞くことができて良かったです。

自己満足にはならないで本当にやることを見極めることが大切なこと

具体的な取り組みを聞いたのでよかったです。

足し算ではなく掛け算で考えるという視点を改めて認識できた点

高齢者の方を支援するために高齢者以外の視点が大事であることが印象に残りました。

いろいろな事例などを聞くことができてよかった。

高齢になる段階前から地域とのつながりに慣れ、成功体験を積むことが大切であること

人と人とのつながりが、やはり大切なのだと感じた。

どの事例でも、自然と多世代交流できるような仕掛け作りがあり、今後の事業運営の参考にしたい。

私は2層協議体を実施しています。齋藤さんのデータやアセスメントから地域介入している部分が大変参考になりました。

高齢者支援へダイレクトにではなく、若い世代への発信から高齢者へと多世代交流の活用の取り組みを知ることができた

高齢者に特化せず、多世代での地域づくりの必要性

多世代交流の場として高齢者が集まる場所で行い、地域との繋がりを繋げていく

高齢者の活躍の場として他の事業と掛け算をすることもできる。

多世代を巻き込んで取り組むことが大切。まず「高齢者」をターゲットとして考えるだけでなく、こども・ママそれ以外の世代から始めることも一つなんだと気づいた。

結果として高齢者の活躍し、元気になることにつながっていくこと

それぞれの取組によって高齢者やママ、子供たちが地域の中で役割を持って活躍されている様子が分かった。

問3. 本フォーラムで良かった点、印象に残った点を教えてください (2/6)
基調対談の内容が大変参考になることが多く参考にさせていただきます。
できるだけ地域内だと思っていたが、越境していいんだと思えたのでよかった。
ママのHOT ステーション
行政やSCが役割をもって活動することを明確に話をしていたこと
生活支援体制整備事業は高齢者だけのものではない。高齢者だけでなく多世代が楽しく元気に暮らせる地域づくりが重要であることが、当フォーラム全体を通して分かりやすく解説されていて良かった。
生活支援体制整備事業が地域づくりの基盤となっている点。
様々な事例を聞くことができて良かったです。
地域外連携の前に、分野外連携に目を向けると、見えていなかった資源が見えてくる気がした。
基調講演の中であった、「やる側ファースト」という言葉が印象的でした。ありがとうございました。
基調講演 やりたいこと、できること、求められてること 社会状況変化によりそこが変わっていくという視点
農業とのコラボについては可能性が広がる印象を受けました。住民しだいですね。
各地域の魅力的な活動の様子を知ることができ勉強になったのと同時に、登壇者の皆様からパワーをいただいた研修会でした。直接従事する立場ではなく、委託元という立場の難しさを感じていますが、まずはSCさんとの目線合わせを根気強く行い、良い関係性で一緒に協力していきたいと思えます。ありがとうございました。
地域づくりや世代に関わらない地域支援が結果的に高齢者の役割を持つことのできる支援につながったこと。
登壇者の方たちが、地域のことを自分ごととして活動していることが、地域の方々に伝わり輪が広がっていくのだと思いました。
どの事例でも、やってみようと言いつ出人、引っ張ってくれる人がきっかけを作ってくれているのだと感じました。たくさん壁を超えて地域を豊かにしている姿がとても印象に残りました。
今後の地域づくりに参考となる要素が多かった。実施内容の詳細まで聞け良かった
高齢分野にとどまらない、他分野同士の間掛け算による連携、実施には課題も多いが、一部の基調講演でもお話があった、小さな取り組みからでも始めていくことが大事、行政としてもどうしても制度にとらわれがちだが、非常に大事な視点だと感じました。
どの事例も、「高齢者の支えあいの仕組みづくり」に対して直球で取り組むのではなく、まずは地域に入り地域住民を知る、声を聴く、多世代間をつなぐコミュニティづくりをして、結果的に支えあいの仕組みができていくということがとても印象深かったです。大きな事をするのではなく小さな成功体験を積み重ねていくという言葉も力強く感じました
多世代の交流に繋がったり、高齢者が生き生きできる場所や仕組みづくりを教えていただき、少し気持ち的に生活体制整備事業について考えたくないと思っていたのですが、少し地域に出向いてみようかなとか、落ち込んでいた私の気持ちが前向きになれました。
生活支援体制整備事業を進めるうえで、地域づくり＝過去に戻りたいのか？と思うことが多々あり、このままの方法でいいのかと考えていました。斎藤さんの基調講演をお聞きし、うわべだけの社会構造の変化を確認するのではなく、詳細にデータを分析し、今必要なことは何かを考える機会になりました。また、分析方法は今後の第10期介護保険事業計画の作手にも参考になる内容でした。
福祉の枠にとらわれない自由な発想、でも根拠のある取り組みは非常に参考になったのと同時に、ここまでの活動に中での苦勞、労力は計り知れないなと思いました。正直、福祉の枠の中でやれたほうが楽だと思うのですが、福祉臭が強いと集まるのは決まった顔の年よりだけ、活動が広がらないという悩みがあります。壁を突破するのは、まず自分自身体と思えました。今回の発表で勇気もらったような気がしています。ありがとうございました。
ママのホットステーションが興味深かったし、高齢者を大切にしてくださっているところが大変うれしかったです。
各自治体や地域内での実際の事例をふまえた説明でとてもわかりやすく、面白かった。これらの取り組みを自地域で参考にできればいいと思った。
高齢者だけに特化しない地域づくり、地域共生社会を作るといふ、今後の活動で新しい視点に気づかせて貰ったことが印象に残りました。
①プロデューサーは、行政の役割。 ②高齢者も地域の担い手 × 若い人たちの活躍の場づくり わくわくする取り組みを増やす。
最初から高齢者支援を目的にしないでスタートしている点が新鮮でした。

問3. 本フォーラムで良かった点、印象に残った点を教えてください (3/6)
<p>倉嶋さんからは、コミュニティ醸成をしっかりと行ったというところ。つなげることは意識しつつも目の前のコミュニティにしっかりと向き合い作り上げていくことを優先させて焦らず行っていたこと。</p> <p>熊谷さんからは、なんとかしなきゃないんだと課題意識をもってしっかりと取り組もうとする人が地域にはいるから、SCはそういう人とつながれるようにしないといけないこと。そして活動がひとたび始まると思いは広がり良い方向に進んでいくこと。能登谷さんからは、自分が楽しむ。笑顔でいる。地域の人を偏見なく知りたいという熱意。とっても良かったです。ありがとうございました。</p>
<p>生活支援コーディネーターとなりまだ間もないですが、今回の研修を受けて高齢者間だけでつながりをつくっていくのではなく、世代間交流や若い世代へのアプローチなど、幅広い分野でのつながりを学び大変勉強になりました。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 世代間交流が機能することで地域の活気がでること。高齢者を切り口に事業をすすめているが、これからは若い人をどう巻き込んでいくかも課題。 ・ いつまでも同じことをしているのはどうか？地域の課題を読んでいくことが大事。
<p>熱い思いを持って活動されている方の思いを聞いたこと。また、自分と同じ悩みを抱えながら実践されてきたことに、勇気をもらえました。</p>
<p>基調対談では、高齢者の割合と担い手不足の問題の話が、セッションでは、多世代を巻き込んだ取り組みを、小さな積み重ねやつながりづくりから行っている好事例が参考になった。</p>
<p>地域外の力を活かすために尽力をつくして活動されている方々のお話を聞いて本当に参考になりました。私共の村も限界集落になってきております。その中でどう地域内外の力を借りて村の可能性を延ばしていけるのか、もっとできることはないのか、たくさんのヒントを得ることができました。基調対談がテンポ良く始まって楽しい雰囲気スタートできたのも良かったです。そして同じ北海道の音更町のママHOTステーションの倉嶋さん、花巻市高松の熊谷さん、高根わあらの能登谷さん、皆さんの活動がとても素晴らしくてとっても素敵でした。ありがとうございました。</p>
<p>使えるものは何でも使おう！とのセッションタイトルに大変興味を持ち参加させていただきました。これまで定年を迎えて地域の担い手をお願いしても数年後には後継者問題が発生し、継続の課題があることが課題と感じていました。今回お話を聞いていて、1ターンやリターンで若い子育て世代から地域に関わり、その延長に自分の高齢期があることが自然と地域の活動に繋がるのだと改めて感じられ、多世代で地域を作ることの重要性を再確認しました。大変貴重なお話をありがとうございました。</p>
<p>基調対談の斎藤さんの話が大変参考になりました。</p>
<p>一つの事業からいかようにでも広がれる可能性があることが分かった</p>
<p>コメンテーターが多機関・多職種だったので、いろんな人の意見を聞くことができてよかった。</p>
<p>今回の事例発表を聞くにつけ、SCの仕事は創造的であり、楽しいものである（あるべきだ）とあらためて感じた</p>
<p>多世代の交流についてのお話や生活支援コーディネーターの経験からつながっている事などこれからの活動について考える機会をいただき、大変良いお話だったと思います</p>
<p>年代に関係ない人と人の助け合いが全面にでていたこと</p>
<p>活動・事業の見直し・再編なしに担い手不足は解決しない</p>
<p>花巻市の6名の有志の活躍について凄いと感じ、このような声を上げる人々にscとしてコーディネートする本来の形での関わりをしたいと思います。</p>
<p>地域・社会の状況は大きく変化しているという点に共感を感じた。10年前と今では、インフラの状況、人口、年齢層など社会は変わっており、変わりゆく社会に合わせて事業を進めて行く必要を感じた。また、高齢者特化に考えるのではなく、他の団体などと協力をし、子ども、若い世代を巻き込み、掛け算で事業進行を行っていくことも一つの手段であることを学びました。</p>
<p>多世代交流・高齢者の活動の場・高齢者が元気になることで地域も元気になる・感謝の気持ちを忘れず笑顔で対応、接すること・地域とのつながり、対話ができる関係性が大事。</p>
<p>地域に住む高齢者を含めた皆さんがいきいきとしていることがわかった。子どもを地域で育てることが、地域を守ることにつながる。郷土愛が地域の支え合いの基盤を作っている。普段からの関わりを意識して事業に関わっていききたいと思います。</p>
<p>お話の内容もとても良かったです。大阪のママのHOTステーション関係者の方が談笑されている姿が見えたり、その後能登谷さんが笑顔が大事とお話しながら笑顔を崩さずにいたことから、活動をされている方々がその輪を広げる、続けていくために大切にしていることが感じられたような瞬間がとても印象に残りました。</p>
<p>「小さなことから」、「まずは自分が楽しく笑顔になることから」そして「チャレンジを怖がらずに楽しむ」が心に響きました！</p>

<p>問3. 本フォーラムで良かった点、印象に残った点を教えてください (4/6)</p>
<p>基調対談・セッション内容とも、今後SCが事業を推進していく上でとても参考になりました。最後、委員の方々のご意見もとても貴重なもので、どのように生かしていこうかワクワクしました。天童市の第二層協議体でも、多世代を巻き込む・高齢者が活躍できる場（光齢者を目指す）に取り組んでいます。ロジックモデルを活用しながら、ビジョン(ありたい姿)に向けて、多様な主体と情報共有しながら進めていきたいと思っています。どのお話もとても面白く、自分も楽しみながら、みんなが笑顔になれる関わりをしていきたいです。ありがとうございました。</p>
<p>担い手不足はどこの地域でも課題となってきているが、若い世代から地域に自然と関わられるような仕組みづくりが大切だと感じた。特に、子どものころから自然と楽しみながら地域活動に参加していくことが、20年後、30年後のまちづくりには大切な要素となる。</p>
<p>高齢者を細分化した将来予測のデータにはっとさせられた</p>
<p>生活困窮者自立支援制度の担当部署に所属しており、世代を問わない困りごとの相談支援として自立相談支援機関を委託実施しています。自立相談支援機関はまだ認知度が低く、実際に相談に訪れる方の多くは第2のセーフティネットでは支援が厳しい、第3のセーフティネットである生活保護へのつなぐような状態です。今回の講演にもあったように、困ってからつながるのではなく、困る前からつながる大切さ、孤独・孤立を防ぐためにも地域のつながりがいかに重要であるかを改めて知ることができました。また、地域のつながりが深く・濃くなることで、地域の活性化・振興にもつながり、地域自体が安心して過ごせる居場所になると感じました。生活支援というテーマではありましたが、地域福祉や町会活動、子どもの見守りなど幅広い分野において生かせるものであったと思います。ありがとうございました。</p>
<p>人口減少の変化は避けられませんが、地域に長く住んでいる方の知恵や地域外とのつながりも広げていき、新しい形の支えあいを作ることで、小さな地域でも暮らしを守り続けられる力が生まれていくのではないかなと感じ、大変勉強になりました。</p>
<p>今日の講演や発表を聞いて、これまで行政からは通いの場を作るように求められたり、市のビジョンとのすり合わせができていないと感じることが多く、住民へも役割ばかり求める形になってしまっていたと反省しました。“高齢者の助け合い”から入るのではなく、まずはネットワークを作っていくことが大切であるという点が、これからは重要であると思いました。発表者のみなさんの言う、すでにあるものを掛け合わせていくという視点を持っていくことを学べてよかったと思いました。</p>
<p>単なる体操教室や筋トレ等を行うのではなく、高齢者の持っている知識・技術等をどうやって引き出し、高齢者自身の生きがいや周りの人達に繋げていくか。また、それについても体操教室等開催と同等に評価されるべき。</p>
<p>高齢者支援は工夫次第で様々な入口があることが分かった</p>
<p>庁内の他部署の取組を知る必要があるといったお話があり、まさしく今痛感しているところです。庁内連携が最も難しいと感じています。最近生活支援体制整備事業がらみで聞く研修内容は、すごい人がいて仕組みができている場合が多いです。熊谷氏の発表にあった「しょせんは素人 2年目には活動に行き詰まり」というのは、頷けました。でも、突然アドバイザーが現れるんですね〜。何故?どこからこういった人につながるの?と思いますながら聞いていました。</p>
<p>かけ合わせる、まき込む 様々な形で実践されている方々の話は参考になりました。自分に何ができるか一です。インドア派の方の笑顔を引き出す一個々にどれだけ向き合えるか。大事なことですね。</p>
<p>日々活動していく中で、「福祉」だけでは解決できない課題等、様々な機関と連携しないと進まない事業であると感じていたので、本日の内容は参考になりました。伺った発表がどれも素晴らしすぎて、みなさんのように自分たちの町に合わせた取り組みを進められるか少し心配になった部分はありましたが、住民のみなさんの話を伺いながら一緒に考えていきたいと思っています。</p>
<p>「福祉の視点だけでなく広く見ること」という考え方。</p>
<p>発表者のみなさんの話を聞き、地域との顔の見える関係性やつながりの重要性を改めて実感しました。SCとしての仕事の面ですが、プライベートな面で自身が住む地域についてもリアルタイムで地域の行事が無くなってきたりPTA・子供会等もなくなってきており、自身の子供たち世代の地域との関わりが希薄さを感じました。また、実際に地区社協等で役をされている地域の方から、高齢者部門だけでなく、児童部門でも同じように役を担っているので、両方から求められることが多く、負担感を口にされている方もいます。今回の研修を参考に、SCとして今後も地域づくりにおいて住民の方をサポートできたらと思います。</p>
<p>こども、ママたち世代の集まりから高齢者との交流の場につながる話を聞いて参考になりました。集まりの場へ行くのを好まない人もいらっしゃるの、そういう人へのかかわり方も参考になりました。たくさん事例を聞くことでこういうつながり方があるんだとたくさん考えさせられました。</p>
<p>農業・福祉・交流で地域が元気になる事例は、移住者と地域住民が貴重な人材として活躍しているという力強い報告でした。ありがとうございました。</p>

問3. 本フォーラムで良かった点、印象に残った点を教えてください (5/6)
基調対談が印象に残りました。時代が変化しているのに事業や組み立てを変化させないのは無理が生じるという部分が共感する部分が大きくありました。変える＝否定ではない。リスペクトをもって変化させていくのが大切。地域にデータを提示する際も、集落ごとの人口データをだすのは良いなと感じました。我がごとになりやすいと感じる。
支援者になれる世代の母数が減っている中で、求められることが増えている現状
事業所のある地域、自分が住んでいる地域共に、限界集落目前の母数減少が目に見えており、自分が、施設が、何ができるのだろうと考えながらお話を伺っていました。基調講演の、『地域活動を強要する構図』を、変化した社会状況にどのように合わせるか、人々をどう説得していくか…心に残りました。行政は、『制度で決まったから』ではないプロデュース、SCはどう仕掛けるかが問われていると感じます。一緒に『楽しい事ができるよ』考えていきたいです。
福祉分野外との協働の在り方の視点について参考になりました。
いろいろな活動者の経過含めた話を聞くことができた。
能登谷さんの若い世代へのアプローチ(取組み)が参考になりました。
地域の状況が変わっているのに、活動や事業のやり方が変わっていないので、やる側ファーストにしていく、次の世代に引き継いでいくためには変えることが必要。また、どのように協働していくかのヒントをもらった気がします。
セッションの3つの発表事例も大変参考になりました。住民側の声をよく聞いて活動に繋げて取り組まれている事が印象に残りました。
住民だけでは難しくなっている地域活動やささえあいについて、企業や学生など地域外の力、高齢者以外をどう巻き込むかをいつも悩ましく感じているので、とても参考になりました。
基調対談も含め、発表者の話がとても説得力があった。
生活支援体制整備事業と地域福祉事業の関わりについて
実践もさることながら、取り組みに対するビジョンが明確で、住民との自然な距離感とSCの考え方をさりげなく地域活動者へ伝えていくことに感銘を受けました。
分野横断的な連携の先進的な事例を知ることができたのが良かった。
コメンテーターの質問や助言が大変良かった。
ベースが高齢者分野の生活支援体制整備で子供からアプローチするのは違った視点でよかった。
斎藤氏と竹端氏の対談が特に良かった。斎藤氏の報告は特に今の生活支援コーディネーターの取り組み方や地域組織の課題を的確に指摘し、どうすべきかを具体的にわかりやすくお話して下さっており、本当に参考になった。また、竹端氏の質問も、まさに地域担当として直面する難しさや課題をよく把握されたうえでそれぞれの報告者に投げかけられておられ、当研修を受講しているSC達に何とか活動のヒントを得てもらいたいという意図が伝わってきてとても心強く思った。総じて良い研修でした。ありがとうございます。
現場の課題をはっきりと述べられていた
現在の自助共助互助などの限界について同じように感じている方がいる事に安心しました。
登壇者が楽しんで活動している点良かったと思います
どの事例の発表も大変参考になった。「自分ファースト」という言葉があったように、楽しく笑顔で活動する姿に、一緒に活動したいと思う方が集まり、地域に広がって行く力があると思う。また倉島さんの活動のようにママの力は、地域にとっても大きなエネルギーになる一方、こういった活動がなければ、横のつながりが希薄になりがちな世代でもあるので、若い世代がつながりを持つこと、地域に目を向けるきっかけづくりは大変重要なことだと思う。
3事例とも、高齢者も混ざり合った地域づくりがされていて、とても参考になりました。
国、県、行政関連団体主催とはまた視点の違いを感じ、新鮮だった。竹端先生の各発表者への質問が的確で、自分がまだ認識できていない深いところまで掘り下げ聞いてくださったので、とても参考になったと感じた。
コメンテーターがいることでより深く知ることができた。
人口減少に伴い、今まで高齢者が担っていた活動をそのままに、若い世代に担ってもらうのは難しいという話に共感した。
地域住民の声を聞き逃さず、既存の資源を掛け合わせて様々な新しい居場所や活動ができていく点、そこに向けた瞬発力も待つ力も含めた行動力や一緒に何かしたい人/団体と折衝・交渉・連携する力など発表者の方々の持つセンスが素晴らしかったです。
基調対談の内容で、担い手が減っていることやこれまでの手法を変えないと存続ができないことをどうやって住民にわかってもらうか、について、具体的にご説明いただき、わかりやすかったです。

問3. 本フォーラムで良かった点、印象に残った点を教えてください (6/6)
フォーラムありがとうございました。残念ながら地域の会議が入り研修に参加できず、すいませんでした。Eメールで返信をしておりましたがなかなか送信不能で連絡が取れずすいませんでした。ありがとうございました。
「困りごと」というより「しんどくなってきたこと」と言ったほうが議論が深まること。入り口は高齢者の課題として入る必要はなく、様々な話題をいかに高齢者に当てはめていくかという視点で考えられていること。
今回の今回のフォーラムでは、一見福祉や地域づくりとは結びつきが少なそうな企業や団体が一緒に地域づくりに関わってくれている素晴らしい事例を見ることができてとても勉強になった。高齢者を中心に地域づくりを展開していくという形だけに囚われず、「こういう地域にしたい」「みんなが笑顔になる地域」という広い意味で地域を捉える想いの延長線上に「地域の高齢者の安心・活躍・生きがい」が実現されている地域づくりの考え方・視点も必要だなと感じることができた。
高齢分野や福祉分野外での活動に視点を置いた協働事例を学ぶことができて良かった。
地域の方でこれほど活動に広がりが出るという点が印象的でした。
基礎対談の「地域外の力と協働と可能性」の中で、現状の地域の状況について話された内容を聞いて納得する部分が多かったです。特に、「地域を動かすのは個人(SC)ではなく「チーム」(行政・SC・地域住民)で協働して作り上げる。」「それぞれの得意分野を活かして役割を明確にする。」「行政が描く整備事業とSCの活動がマッチングしていないといけない。」等
もう一度これまでの動きや考え方などを見直す必要があると思いました。
基調講演の「人口が減るのだから分野横断で地域づくりに取り組むべき」の話と、ママHOTの発表が特に印象的でした。私も高齢者同士の支えあいには強く限界と違和感を感じていたので、多世代交流や福祉外の主体とのつながり作りが今後のSC活動のキーワードになる気がしました。若い世代や高齢者福祉以外の分野にどうやって声をかけて関係作りをしていくか悩んでいましたが、そのヒントをもらえました。
活動している内容や、視点は近いことが出来ていましたが、本日の発表者の皆さまは更に活かした活動につなげている事でより多くの方々にとって意味のある活動につながる動きをされていることに感動をしました。改めて自身で取り組んでいることを振り返り「かけ算」できる視点を養いたいです。ありがとうございました。
多世代による地域づくりについての話を伺うことができて視野が広がった。
3事例とも高齢者の方の持っている力を活かし、やりがいや役割、活躍の場を広げながら、多世代や他の分野との連携に繋がっていく、素晴らしい取り組みをされていると感じました。今回学ばせていただいたことを、地域に出て住民の方と関わる中で活かすことが出来るように、今後もさらに積極的に地域に出向きたいと思います！大変貴重なお話をありがとうございました。
どの事例でも生活支援体制整備事業にとどまらない、広い視野で活動されているところ
ひとつひとつの事例がそれぞれ全く異なる形で活動していること。また、それぞれが最終的に高齢者・多世代の地域参加、ネットワークに結びついているところ。

<p>問4. 改善してほしい点、もっと深めたいテーマや話題などがありましたら教えてください。 (1/2)</p>
<p>生活支援コーディネーターが迷走しているのでは??と危惧しています。 分野横断はとても大切ですが、職名や行政の意向によって自治体間の差が大きくなっている気がしているのは私だけでしょうか。感想まで・・・。 受講の機会を頂きありがとうございました。</p>
<p>途中、退出で申し訳ありません</p>
<p>取り組みがうまくいかなかった時期に取り組んだこと、考えたことなど</p>
<p>老人クラブとは</p>
<p>活動報告を聞くことはできましたが深い内容まで聞くことができなかったと思います。悩みや課題なども知ることができると良いと思いました。</p>
<p>各種団体や企業とつながる方法や声掛けの方法について</p>
<p>高齢者を主体として、多世代と交流していった事例などももっと紹介してほしいです</p>
<p>セッションの報告にあったような成功事例につながったきっかけとなった、生活支援コーディネーターとしての視点や地域との関わりについても、具体的な発表を聞いてみたい</p>
<p>定期的開催していただけると自分の活動の参考や刺激、励みになります</p>
<p>休憩が前半にもあると助かります。SC といっても様々な所属や立場がいらっしゃると思います、今回の事例を聞いてすぐに実践は難しいと思いますが、小さな成功体験を積み重ねるなど考え方のところでも参考にさせていただきたいと思いました。</p>
<p>アーカイブをして配信してほしい</p>
<p>本日のテーマの深掘り</p>
<p>様々な事例が成功するまでには失敗や苦労を経験しているかと存じます。それに対してどのように対処されていったのかまでお聞きしてみたいと思いました。</p>
<p>市（第一層）のSCと社協（第二層）のSCとの連携の方法でいい事例等あれば、知りたいと思いました。</p>
<p>今いる担い手をどうつなげていくか、無関心層に注目すべき印象をうけました。</p>
<p>きっかけになる人を見つけるのが難しい、きっかけ探しが難しいと感じる場面が多くあり、地域の人と繋がる機会がなかなか無いように思います。具体的なきっかけのエピソードやポイントがあれば是非聞きたいです。</p>
<p>最初に2時間通して休みなく話をきくのはしんどい。間でもう1回くらい休憩がほしい</p>
<p>本日のように、前向きになれるような事例などをもっとお聞きしたいと思いました。</p>
<p>本日は研修ありがとうございました。</p>
<p>最後の質問にあった行政内での掛け算の仕方を深掘りしてほしい。</p>
<p>音が小さく、聞き取りにくかったです。ことらの環境なのかどうかもわかりませんが、特に事務局側の声が聞き取りにくかったです。</p>
<p>コメンテーターの方々の議論や質疑応答をもっと聞きたいと思いました。</p>
<p>生活支援コーディネーターに特化したセミナーを開催していただきたいです。</p>
<p>生活支援コーディネーターというものがあるのも今回の研修前に初めて知りました。知らないひとも多いと思います。もっとこの活動が周知されるといいなと思いました。今回は貴重な研修に参加させて頂きありがとうございました。</p>
<p>今後同様な事例を聞かせていただける機会があると嬉しいです。</p>
<p>当たり前に行っている助け合いの見せ方</p>
<p>マイクの質によると思うが、ききとりにくい時があった。</p>
<p>SCの活動を硬直的・ステレオタイプにゆがめているのは行政の解釈力に問題があると思う。我々2層SCからみれば、ボトルネックとなっている自治体の福祉行政に対し、国はしっかりと点検して欲しい。また、このような場にもっと行政職員を巻き込んでいただきたい。</p>
<p>ママ世代が持っている力を地域社会で活かせる仕組みづくり</p>
<p>特にありません。</p>
<p>成功例が発表されますが、失敗例もあっていいのでは！これがあって成功あり等</p>

<p>問4. 改善してほしい点、もっと深めたいテーマや話題などがありましたら教えてください。 (2/2)</p>
<p>事業を実施に至るまでのプロセスをもっと詳しく知りたいと思った。また、協議体の設立まで、勉強会など経験談など。</p>
<p>若い世代を巻き込む具体的な方法。どこに声がけをして、どういう内容であれば関心をもって、活動に参加してもらえるのか知りたいです。</p>
<p>基調対談の発表者の斎藤さんの話をもう少し聞きたかった。</p>
<p>コメンテーターさんの出番が少なく、発表者の発表内容に絡めたご発言が欲しかった</p>
<p>地方では絶対的な課題である移動支援政策について</p>
<p>現在総合事業の見直しを行っています。その中で住民の意識改革の必要性を感じています。時間はかかるとは思いますが、できることから少しずつ取り組んでいくしかないとは思っているのですが、すでにある制度を住民の理解を得ながら運用を変更するためのノウハウがあれば、知りたいです。今日の斎藤氏の発表はとても参考になりました。</p>
<p>同じSCのみなさんの先進的というより身近な事例を聞いてみたいです。</p>
<p>早口だった方もいるので、もう少し聞きやすかったら良かったです。※ゆっくりと聞きやすいトーンと口調の方もいて、その発表時は聞きやすかったです。</p>
<p>地域外からの力をいかす。どう繋がっていったかをもう少し詳しく聞きたいと感じた。</p>
<p>地域外との交流人口の増やし方、事例など</p>
<p>こういった研修会では、中山間地域や町村の事例が比較的多いように感じるので、市以上の規模の事例についてもお聞きしたいです。</p>
<p>官民連携の中で、企業側は協働についてどう考えているのかを知りたいです。</p>
<p>意外と質疑応答やパネルディスカッションの時間がなかったのもう少し登壇者を絞るなどしても良かったかなと思いました。</p>
<p>今回の事例場所がちかいので是非現地に行ってみたいです。</p>
<p>居場所づくり、独居高齢者への施策、</p>
<p>とてもいい取り組みを紹介してもらったがハードルが高いと感じた。</p>
<p>今後の地域づくり（福祉も含む）の進め方について焦点を当てた研修を改めて実施してもらえたらと思います。</p>
<p>今後も各地の取り組みなど紹介をお願いします。</p>
<p>セッション部分の発表者3名の内容も非常に興味深く聞いたが、時間が短いせいか？説明が駆け足だったと感じ、内容が良いだけにもったいないような気がした。各発表内容が濃かったため、3つ続けて聞くのは少々頭が疲れたので、可能なら発表の合間に少し休憩を入れてほしかった。</p>
<p>発表者の方々のような地域づくりに熱心な人・団体は各地にいらっしゃるかと思います。セッションでご発表くださった3名の方々、その地域のSCさんと実際どのように連携されているかがあまり見えてこなかったため、「生活支援体制整備事業、地域支援事業における地域づくり」についての議論という点で、もっと聴いてみたかったです。</p>
<p>今回の事例のように地域づくりに協力してくれている企業や機関などからも地域づくりに関わるようになったきっかけや地域に関わってみて感じた心境、今後企業視点でどう地域と繋がりを持ってそうかなど声を聴いてみたい。</p>
<p>生活支援体制整備事業関係の研修では、比較的人口の少ない山間部等の町村での事例がよく紹介されているが、もう少し大きな規模の自治体での事例も学びたい。</p>
<p>本市では生活支援コーディネーターは存在しているが、実質的に機能していないため、どこから手を付ければいいのか悩んでいます。</p>
<p>アーカイブ配信があると嬉しいです。</p>
<p>地域福祉と生活支援コーディネーターが行っている活動の違いについて、もっと聴きたいと思いました。</p>
<p>とても参考になりました。縦割り行政ではできない、横のつながりをどう作るか、とても身になるフォーラムでした。SCだけでなく行政の各部署の担当者にも聞いてもらえたらよかったです。</p>

「地域外の者の関与もふまえた互助の持続可能性を高めるための地域づくりの

あり方に関する調査研究」研究委員会委員長

東北福祉大学 総合福祉学部 教授 高橋誠一

【「地域外の力」が必要とされる背景】

委員会の議論を通じて、地域外の力が求められる背景として以下の点が共通して確認された。

- 人口減少・高齢化による担い手不足 —— 地域内のみでは活動維持が困難
- 「内向き固定化」の打破
—— 地域内の関係が固定化するほどイノベーションが起きにくい
- 「当たり前」の価値の再発見
—— 地域住民が見えなくなった地域資源を外部視点で掘り起こす
- 高齢者の活躍機会創出
—— 外部の目が高齢者の知恵・技を「宝」と認識する

このような状況に対して、宇川加工所代表の言葉が多くの可能性を語っていると思う。

「よそから来た私にとって、ここは食材の宝庫だらけ。地元の人にはサザエやアワビが珍しくもないけれど、外から来た私にとってはすごく価値があった。その思いが宇川加工所の立ち上げにつながった。」

【地域外の力が生きる条件】

- ① 地域側の受容性 —— 「よそ者」を迎え入れる「土壌」

委員会の議論において、地域外の力が発揮されるかどうかは、外部者の力量と同等かそれ以上に、地域側が「よそ者」を受け入れられる土壌・文化を持っているかどうかにかかっていることが確認された。

とかの元気村の事例では「人口 3000 人という規模感」が一因として挙げられたが、同じ佐川町内の他地区では類似した動きが起きていないことから、人口規模よりも地区が培ってきた「対話の文化」や「歴史的経緯」が大きく作用していると考えられる。「よそ者」を受け入れるかどうかは、その地域の長老たちが固定したしきたりに固執するのか、若い人や違うやり方も受け入れられるのかにかかっている場合もある。

また、受け入れやすい土壌がない地域に無理に外部者を送り込もうとすることは、当事者を傷つける結果にもなりかねない。地域によっては「よそ者」がいなくても成り立っているケースもあり、「地域外の力を活かすことが絶対的正解ではない」という前提に立つことが重要である。

② つなぐ人・ハブとなる人材の役割

事例を通じて、地域内と地域外をつなぐ「ハブ」となる人物の存在が成立要件として浮かび上がった。この点を「属人的要素か仕組みか」という問いで整理できるだろう。「結」プロジェクトで指摘されたように、発起人が亡くなった後も仕組みとして継続しているケースがある。このことは「最初に少し変わった人がいて事が動き、やり方がきちんと継承されれば回り続ける」ことを示しており、属人性を仕組みへと転換するプロセスが重要であることを示唆する。

「よそ者」ならではのハブ機能として、以下の点が明らかになった。

- しがらみのなさ —— 地元の人には話せないことを引き出せる
- 文脈を知らない強さ —— 敵対されにくく、先入観なく接することができる
- 「正直な鏡」機能 —— 地域の人が見えなくなっている価値を可視化する

③ 関係の深まり方 —— 「対話の文化」の重要性

複数の事例において、活動の後に設けられた飲み会・食事会が人間関係の深化に寄与していることが報告された。委員会ではこの「飲みニケーション」について活発な議論が交わされた。

飲みニケーションは昭和の残滓ではないか。飲み会に参加しないと仕事ができなくなると、若い世代・シングル女性・子育て中の人々が追い詰められる、という意見に対して、大事なものは腹を割って対話できる場の設計であり、お酒がなくてもできる対話の文化の土壌をどうつくるかが問われていることが指摘された。

この議論から浮かび上がった本質的な要点は次のとおりである。

- インフォーマルな対話の場の価値
 - 公式会議では出ない本音・アイデアが生まれる空間
- 「企画段階からの参画」の重要性
 - 本番だけの関わりではリピーターにならず関係も深まらない
- 年間を通じた継続的な関わりの場
 - 祭り・農作業等福祉との関係が意識されにくい取り組みであっても、福祉的機能が内包されている。年間を通じて何かがあるところでは、集まるたびに

人間関係が生まれ、来ない人への気づきが自然に生まれる。これは福祉のサロンと同じ機能を持っているが、今は必ずしも十分に評価されているとは言いがたい。ここにもっと着目すべきである。

④ 地域外の力を受け入れる際の留意点

- 「悲壮感でなく楽しさ」で動くこと
 - 危機感だけでは外部者は集まらず、継続しない
- 外部者の「観光目的」との区別
 - 「結」プロジェクトでは労働意欲のない参加者を断った経験がある
- 受け入れキャパシティの管理 —— 過剰な受け入れは地域側の疲弊につながる
- 「移住者の会」による孤立リスク
 - 移住者だけが集まる場はかえって地元との分断を招く可能性がある
- 制度的制約への対応
 - 道路運送法（外出支援）、任意団体の貸借契約不可等への対応

【各主体への示唆】

委員会の核心的議論として、「SC だけへのメッセージになることを避け、地域・SC・行政それぞれへの提言を整理すべき」という方向性が全委員から確認された。本章ではその議論を受け、三つの主体それぞれへのメッセージを整理する。

① 地域・住民組織へ

地域づくりにおいて、外部者を「活かす」発想の前に、地域自身が「よそ者を迎え入れられる土壌」を日頃から培っておくことが重要である。

- 日常的なインフォーマルな交流の場（サロン・祭り・農作業等）を維持すること
- 「よそ者」に「声を掛ける」文化の醸成
 - 声を掛けた後の受け入れ方が定着を左右する
- イベントや活動の企画段階から外部者を巻き込む
 - 本番だけの参加は関係を深めない
- 「できなかった理由」を一人で考えるより、「できる理由」を皆で考える場の設計

② SCへ

委員会を通じて、コーディネーターへ過剰なプレッシャーがかかるのではないかと、いう問題が繰り返し指摘された。本調査研究の事例が示すのはSCが全てをやるべきというモデルではない。また、成功事例は『これが全部できなければ失敗だ』ということではなく、成功した理由の解釈として提示しているに過ぎない点に留意願いたい。

- 地域にすでに「ある」資源・つながりを見つけ、価値として可視化することが第一の役割
- 「作れ」ではなく「生きる場を見出す」という発想の転換
- 「よそ者」が入れる土壌のある地域を見極め、適切な場で外部者との接点をつくる
- 地域における「しがらみのない中立者」としての自分自身の立ち位置を意識する

③ 行政へ

「手段の目的化を避けること」「市町村が地域資源を自ら知ることの重要性」が指摘された。市町村によっては介護保険の代替サービスをいつ作るのかというSCに対する圧力が行政側から強まることもあるが、サービスを作れる余裕のある人がいない地域で、それを求め続けることはSCを精神的に追い詰める。むしろ、SCと協力して地域に何があるかを行政自身も知ることから始めるべきだ。

- 「拠点は何カ所作る」という均一目標より、地域にすでにある活動・つながりの見える化を先行させること
- 縦割りを超えた資源活用 —— 農業・交通・産業・地域活動等の施策との連携強化
- 体制整備・環境づくりは行政が担う等、SCに全てを押し付けない組織設計
- 高齢部局外の活動が結果として介護予防・孤立防止に寄与している事例を評価・支援する柔軟な事業解釈の促進

【今後の展望と課題】

① 関係人口・交流人口のさらなる可能性

「観光以上・移住未満」の関係人口は、単なる訪問者ではなく地域の継続的担い手になり得ることが複数の事例から示された。この関係人口を「深めていくか」—すなわち本番参加から企画参加へ、単発から継続的な関わりへ—というプロセス設計が今後の課題となる。

② デジタルと対面の組み合わせ

ママのHOTステーションの実践に見るように、SNS・LINE等のデジタルツールは世代を超えた情報発信と関係維持に有効である。一方でデジタルに不慣れな高齢者には手紙・電話等を組み合わせる細やかな対応が必要であり、きめ細かなコミュニケーション設計が求められる。

③ 制度的課題

外出支援（道路運送法）、任意団体の施設貸借契約問題、農水省・総務省・厚労省の縦割り等、現場の創意工夫を制度が阻んでいる事例が複数確認された。関係省庁間の連携強化と、制度的柔軟性の確保が行政への示唆として挙げられる。

④ SCの持続可能性

SCの離職率の高さや精神的負荷の大きさは、本調査研究の委員会でも繰り返し言及された重要な問題である。地域外の力を活かす「触媒」として機能するためには、SC自身が安心して働ける環境整備（行政・社協・地域包括支援センター等による体制支援）が前提として必要である。

【まとめ】

本調査研究を通じて、「地域外の力を活かした地域づくり」の要諦として以下の点が明らかになった。

- ①地域外の力は万能薬ではなく、地域側の受容性がある初めて機能する。「よそ者ウエルカム」の土壌は意図的に育てていく必要がある。
- ②つなぐ人（ハブ人材）の属人性を認めつつ、仕組みへの転換を図ることが持続性の鍵である。「よそ者」のハブ機能は「しがらみのなさ」「文脈を知らない強さ」に由来する。
- ③インフォーマルな対話の場（飲み会に限らず）を年間を通じて継続的に設けることが、関係の深化と担い手育成の基盤となる。
- ④「企画段階からの参画」が関係人口を「担い手」へと育てる最も有効な経路である
- ⑤「悲壮感でなく楽しさ・面白さ」が持続可能な地域づくりの原動力である。
- ⑥地域・SC・行政はそれぞれ固有の役割を持つ。SCに全てを押し付ける構造は持続可能でない。
- ⑦手段の目的化を避け、「誰もがいつまでも住み続けられる地域」という本来の目的から逆算して、地域外の力をどう活かすかを問い続けることが重要である。

確かに、居住地のみを基盤とした従来の「地縁」は、人口減少社会において脆弱化を免れない。しかし、これまで見てきた事例は、居住地を超え、地域の文化や価値への共感でつながる「新しい共同体（志縁）」の可能性を示している。

地域外の方と協働することは、決して地域の弱体化を示す妥協ではない。むしろ、地域外の方、いわゆる「よそ者」が介入することで、地域には「視点の多様化」と「地域資源の再評価」という計り知れない付加価値がもたらされる。内部では当たり前と見過ごされていた伝統文化や産業の価値が再定義され、それが地域住民の誇りを再燃させるクリエイティブなプロセスとなる。この「開かれた地域」こそが、次世代へ地域をつなぐための最強の戦略となる。

今後、SC が地域づくりや社会参加支援を行う上で多くのヒントを与えてくれるものと思う。さらに、より広い視点から介護保険制度外の取り組みが地域住民の互助の持続可能性をどのように高めることができるのか、SC がどのように支援できるのかさらなる実践事例の検討が必要だ。

最後に、本調査研究で出会った全ての実践者・地域の皆さまに、心から敬意と感謝を申し上げます。地域外の方と地域内の方がつながり合い、誰もが生き生きと暮らせる地域が全国に広がることを願って、本報告書を結ぶ。

■■■■■ 参 考 資 料 ■■■■■

- フォーラム告知チラシ
- フォーラム当日資料
- 実践事例ヒアリングシート

地域外の力を活かす

～地域の協働力の磨き方～

参加費
無料



地域づくりを考えると、人口減少や共働きが一般的になったことなど、ライフスタイルの変化による地域活動の担い手不足という課題が存在しています。このような状況下、地域内の資源のみならず地域外の資源や、狭い地域にとらわれない視点を持つ『外部』との協働、特に生活支援体制整備事業での関与の可能性を検討することは極めて重要であると考えられます。

このフォーラムでは、外部の力の活用や外部との協働をテーマに、生活支援体制整備ひいては、地域支援事業における地域づくりを議論します。

2026年 2月12日 木 13:30～16:30
Zoom ウェビナー開催

対象：生活支援体制整備事業担当者、生活支援コーディネーター、地域福祉関係者ほか

申込方法

【WEB 申込み】

<https://forms.gle/Xgj3Zdry75Jd6osJ7>



【FAX】お申し込みの際には、件名に「地域外の力を活かすー地域の協働力の磨き方」とご記入の上、下記の事項をお知らせください。

・所属・役職・氏名・メールアドレス・電話番号

(同じ所属先で複数人でお申し込みの場合は全員の所属・役職・お名前をご記入ください。)

FAX：022-727-8737

申込締切

2026年 2月6日 金

参加方法

開催3日前を目安に、ご登録のメールアドレス宛にZOOM入室URL等の情報と当日資料をご案内いたします。

当日はネット環境を整えてご参加ください。



プログラム

13:30 ● 開会挨拶 特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

13:32 ● 基調対談 地域外の力との協働と可能性

発表者 都岐沙羅 パートナーズセンター 事務局長・理事 斎藤 主税

コーディネーター 兵庫県立大学 環境人間学部 教授 竹端 寛

14:20 ● セッション 使えるものは、何でも使おう！
～地域の外にも目を向けて～

発表者 株式会社 ママのHOTステーション 代表取締役 倉嶋 香菜子

発表者 花巻市高松第3行政区ふるさと地域協議会 事務局長 熊谷 哲周

発表者 一般社団法人 高根コミュニティラボわあら 事務局長 能登谷 愛貴

コメンテーター 厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課
地域づくり推進室 室長補佐 佐藤 清和

高知県長寿社会課 介護予防・地域支援室 室長 窪田 純子

栃木県社会福祉協議会 地域福祉・ボランティア課
課長補佐 桧原 賢一

沖縄県 本部町 子育て支援課
(元生活支援コーディネーター) 牧田 健太郎

全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

コーディネーター 東北福祉大学 総合福祉学部 教授 高橋 誠一

※セッション中、10分の休憩をはさみます

16:30 ● 閉会挨拶



お問い合わせ

特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター (CLC)
〒983-0045 宮城県仙台市宮城野区宮城野1丁目7-7
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
Email: clc@clc-japan.com URL: <https://www.clc-japan.com>
担当: 渡邊・田所

地域外の力を活かす

～地域の協働力の磨き方～



地域づくりを考えると、人口減少や共働きが一般的になったことなど、ライフスタイルの変化による地域活動の担い手不足という課題が存在しています。このような状況下、地域内の資源のみならず地域外の資源や、狭い地域にとらわれない視点を持つ『外部』との協働、特に生活支援体制整備事業での関与の可能性を検討することは極めて重要であると考えられます。

このフォーラムでは、外部の力の活用や外部との協働をテーマに、生活支援体制整備ひいては、地域支援事業における地域づくりを議論します。

2026年 2月12日 木 13:30～16:30
Zoom ウェビナー開催

プログラム

13:30 ● 開会挨拶 特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

13:32 ● 基調対談 地域外の力との協働と可能性

発表者 都岐沙羅 パートナーズセンター 事務局長・理事 斎藤 主税

コーディネーター 兵庫県立大学 環境人間学部 教授 竹端 寛

14:20 ● セッション 使えるものは、何でも使おう！
～地域の外にも目を向けて～

発表者 株式会社 ママのHOT ステーション 代表取締役 倉嶋 香菜子

発表者 花巻市高松第3行政区ふるさと地域協議会 事務局長 熊谷 哲周

発表者 一般社団法人 高根コミュニティラボわあら 事務局長 能登谷 愛貴

コメンテーター 厚生労働省老健局 認知症施策・地域介護推進課 佐藤 清和

地域づくり推進室 室長補佐

高知県長寿社会課 介護予防・地域支援室 室長 窪田 純子

栃木県社会福祉協議会 地域福祉・ボランティア課 課長補佐 桧原 賢一

沖縄県 本部町 子育て支援課 (元生活支援コーディネーター) 牧田 健太郎

全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

コーディネーター 東北福祉大学 総合福祉学部 教授 高橋 誠一

※セッション中、10分の休憩をささみます

16:30 ● 閉会挨拶

【基調対談】 地域外の力との協働の可能性



特定非営利活動法人
都岐沙羅パートナーズセンター
つきさら
Iwafune, Niigata
理事・事務局長 齋藤 主税

地域外の力を活かす～地域の協働力の磨き方～@2026.2.12

特定非営利活動法人

都岐沙羅パートナーズセンター

活動開始 平成11年6月1日
法人設立 平成14年3月1日
理事 11名
事務局 常勤4名、非常勤1名
会員数 正会員 23個人・団体
賛助会員 76個人・団体
主な活動 新潟県村上地域における中間支援活動
年間予算規模 約3,000万円 (R6決算：約3,178万円)

※行政からの運営費補助／指定管理業務は無し
※収入の大半は委託事業だが、地元だけでなく、全国各地の自治体・地域組織等からも多数受託

- ◎地方自治法60周年記念総務大臣表彰受賞 (2007)
- ◎平成26年度ふるさとづくり大賞・団体表彰受賞 (2015)
- ◎第7回地域再生大賞・大賞受賞 (2017)

新潟県村上地域

(村上市・関川村・粟島浦村)

【人口】 62,915人 (R2国勢調査／20年間で18,946人減)
⇒57,500人 (R7)
【高齢化率】 39.72% (R2国勢調査／20年間で13.6%上昇)
⇒41% (R7)



多様な主体を巻き込みながら、自らが率先して

事業を興す（プロデュース） コーディネートする

中間支援組織の「中間」とは…

地域間	集落同士・旧市町村の地区同士
主体間	住民・NPO・企業・行政・学校…
分野間	農業・観光・福祉・教育・自治…
内と外	県内の他市町村・県外・国外

これらの間に立ち
主体的に動く
潤滑油

都岐沙羅パートナーズセンターの近年の主な事業

地域づくり事業のコーディネート

- 多様な主体が参加した交流機会の創出
▷学校と地域を結ぶオープンセッション
- 農林業振興支援
▷青少年森林林業体験塾／村上市いわふね林業塾
・10年間でのべ参加者350人以上／林業関連就職者20名以上
▷村上市林業チャレンジ事業 ～Mokurin Fes.～
・若者が中心となり森に親しむイベント／200人以上が来場
▷森林空間を活用したプログラム開発、他
- 地域運営組織・集落支援員への支援
▷住民アンケート／活動・役職等の棚卸しサポート（全国各地／約70事例）
▷地域運営組織の形成・持続的運営に関する支援（全国各地）
▷集落支援員研修（新潟県／三重県、他）
- 共助の仕組みづくり支援
▷生活支援コーディネーター（第二層）として活動 等々



地域ツーリズムの開発・プロモーション

- 協議会・組合の事務局を受託
▷村上地域グリーン・ツーリズム協議会／朝日まほろば夢農園管理組合
- 地域内外でのプロモーション活動
▷モニターツアー企画運営／大都市圏でのプロモーション活動、他
- 教育旅行受入・交流人口の創出
▷教育旅行受入のコーディネート／インバウンドツアー受入協力、他



(長年、地域づくり支援を実践し続けてきた立場からすると)

福祉分野の専門家による生活支援協議体／生活支援コーディネーターの説明を聞いても、今ひとつ腹落ち感が得られにくい。その理由は…

**必要性ばかりを前面に出し
共助という名の錦の御旗を掲げて
地域での活動を強要する構図
になっていないか?!**

めざしているところは同じなのに・・・

**地域・社会の状況は
大きく変化している!**

状況の変化 = 前提とする条件の変化

今のやり方・仕組みはこのままでは機能不全に…

地域における年齢層・世代の意味

65歳以上 ➔ 高齢者 でもお元気な方たくさん
いらっっしゃいますよね？

実態を正確に把握するためには、もっと細かく区分してデータを見ていくことが不可欠！

65～74歳 ➔ **いま地域の住民自治を支えている世代**

75歳以上 ➔ 地域を支える側から
自らが支えられる側に
= 後期高齢者

85歳以上 ➔ **4人に1人が要介護3以上**
※要介護3以上の2人に1人が85歳以上

7

新潟県村上市の過去20年間人口推移と今後の20年間の予測値

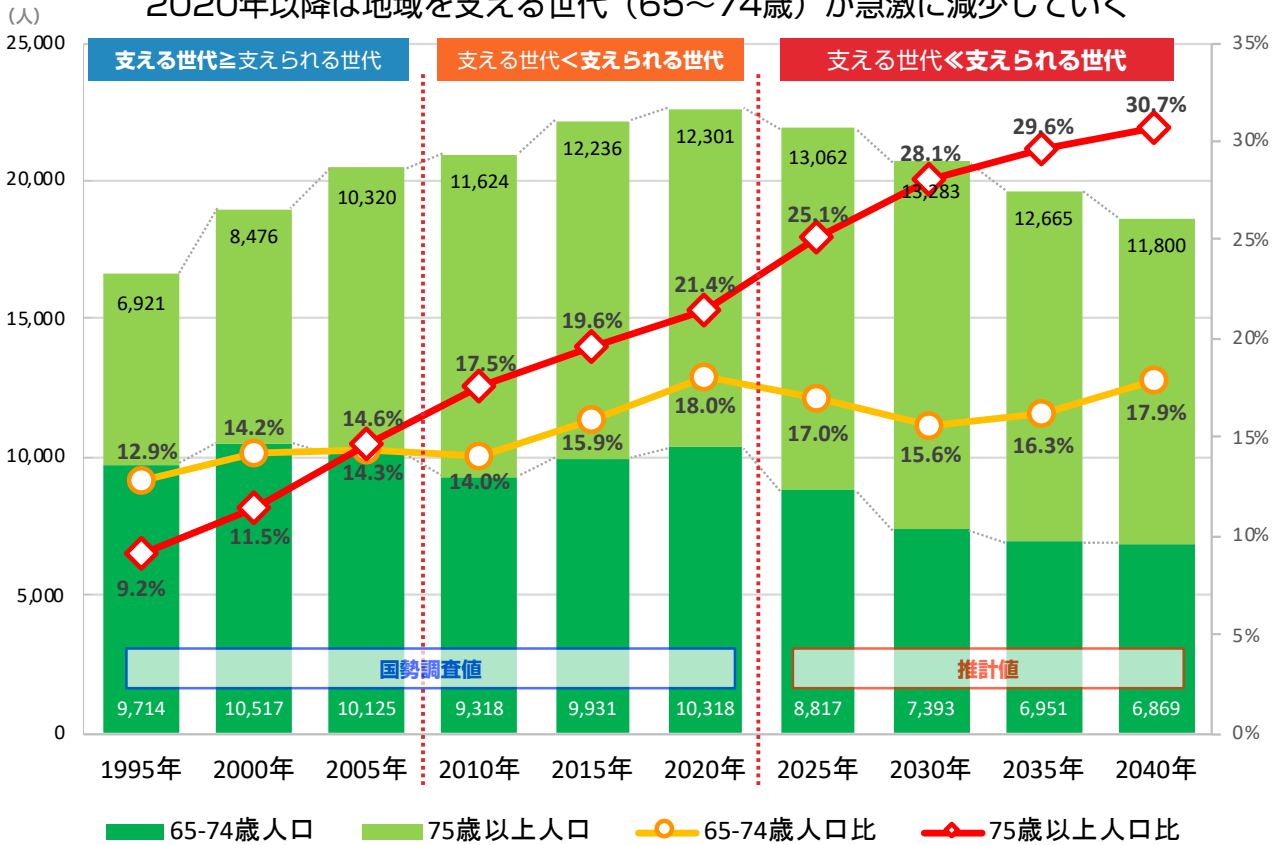
村上市	国勢調査					社人研推計値※			
	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
総人口 (人)	73,902	70,705	66,427	62,442	57,418	51,987	47,270	42,763	38,466
					-22.3%				
0～14歳 (人)	10,774	9,451	7,881	6,609	5,520	4,531	3,578	2,872	2,542
					-48.8%				
15～64歳 (人)	44,104	40,735	37,524	33,578	29,209	25,577	23,016	20,275	17,255
					-33.8%				
65歳～ (人)	18,993	20,445	20,942	22,167	22,619	21,879	20,676	19,616	18,669
					+19.1%				
高齢者率	25.70%	28.92%	31.53%	35.50%	39.39%	42.09%	43.74%	45.87%	48.53%
(再掲) 65～74歳	10,517	10,125	9,318	9,931	10,318	8,817	7,393	6,951	6,869
					14.5%減				
(再掲) 75歳～	8,476	10,320	11,624	12,236	12,301	13,062	13,283	12,665	11,800
					21.2%減				
(再掲) 85歳～	2,067	2,711	3,460	4,125	4,742	4,976	4,805	5,316	5,569
一般世帯数	22,250	22,247	22,006	22,097	21,466	20,100	18,527	16,806	15,057

(参考) 2020年の高齢者率 新潟県平均：32.93%/全国平均：28.68%

※人口：国立社会保障人口問題研究所が2023年12月に公開した推計値
世帯数：IHOE[人と組織と地球のための国際研究所]が公開している集計シートを活用し算出

新潟県村上市の高齢者人口の推移

2020年以降は地域を支える世代（65～74歳）が急激に減少していく



朝日地区の過去20年間人口推移と今後の20年間の予測

※推計値は、各年国勢調査小地域集計データをもとに、年代別人口の推移・変化率から2020年以降の人口を算出

朝日地区	国勢調査					推計値※				
	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	
総人口 (人)	12,125	11,489	10,621	9,617	8,604	7,559	6,585	5,697	4,873	
						-29.0%				
						-43.4%				
0～14歳 (人)	1,805	1,521	1,205	957	728	583	468	386	309	
						-59.7%				
						-57.6%				
15～64歳 (人)	6,888	6,350	5,840	4,980	4,179	3,509	2,952	2,497	2,075	
						-39.3%				
						-50.3%				
65歳～ (人)	3,432	3,618	3,576	3,680	3,697	3,467	3,165	2,814	2,489	
						+7.7%				
						-32.7%				
高齢者率	28.31%	31.49%	33.67%	38.27%	42.97%	45.87%	48.06%	49.39%	51.07%	
(再掲) 65～74歳	1,876	1,697	1,531	1,531	1,643	1,440	1,209	988	855	
						12.4%減				
						31.4%減				
(再掲) 75歳～	1,556	1,921	2,128	2,149	2,054	2,027	1,956	1,826	1,634	
(再掲) 85歳～	376	513	672	793	868	807	678	703	691	

(参考) 85歳以上の4人1人は要介護3以上

(参考) 2020年の高齢者率 新潟県平均：32.93%/全国平均：28.68%

推計値はIHOE [人と組織と地球のための国際研究所] が公開している集計シートを活用し算出

いままでは
地域を支える元気な高齢者が多かった

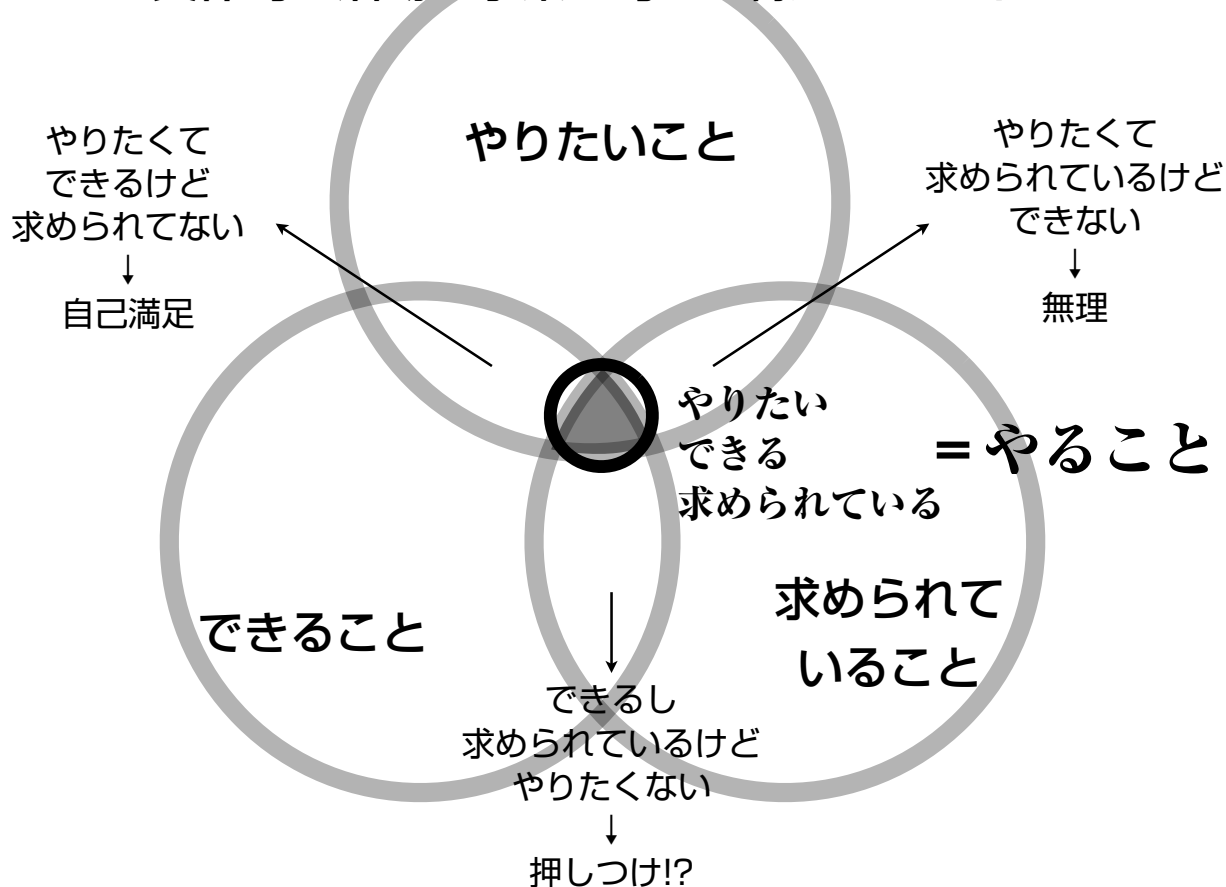


これからは
自らが支えられる側になる
高齢者の多くなる

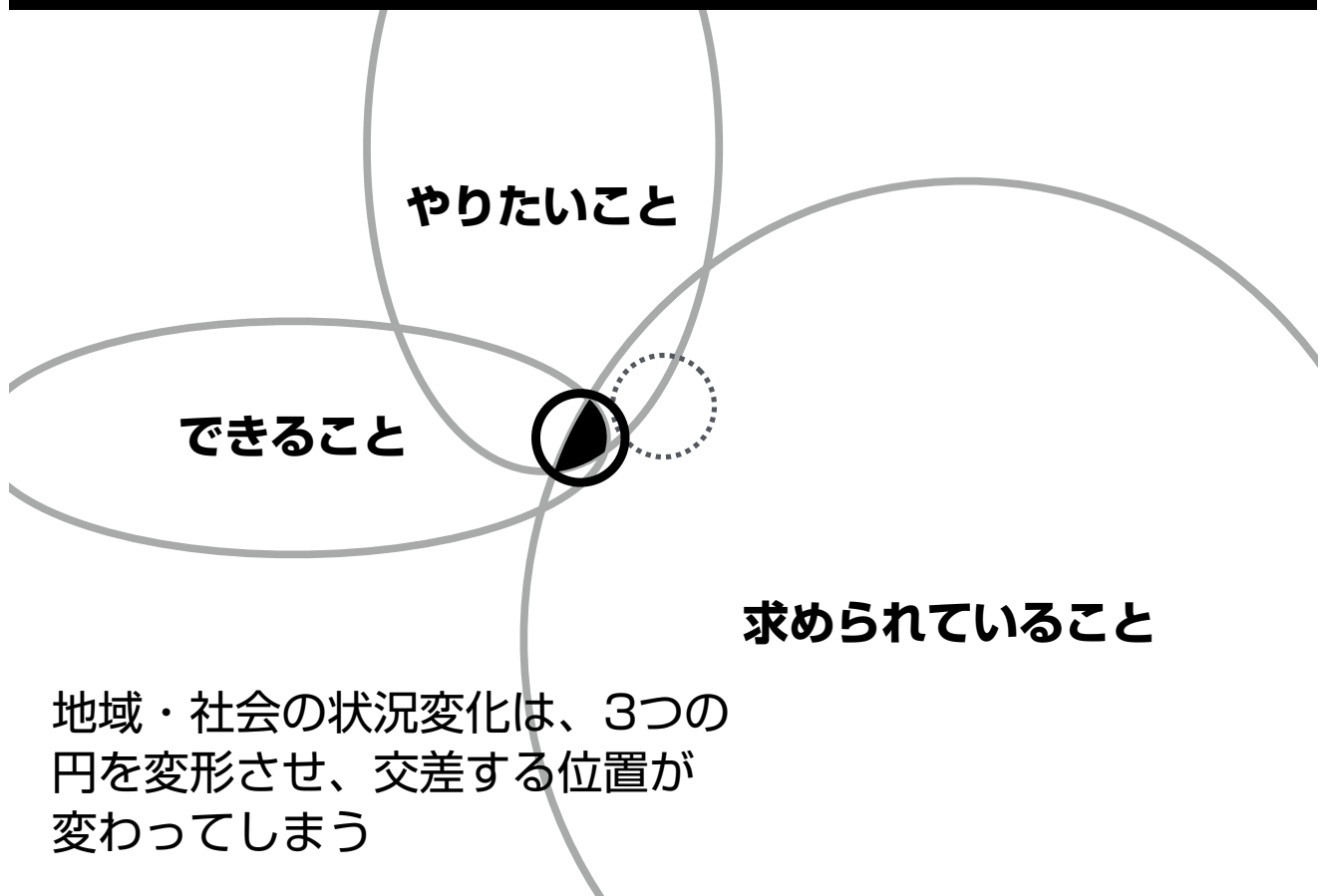


地域での役・活動を担う世代の 絶対数が減少する

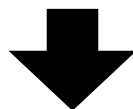
具体的な活動・事業を考える際のポイント



年月の経過と共に置かれる環境も変化



家族の規模が小さくなり
働き方が変わり
地域を支えている前期高齢者が減少



これだけ状況が変わっているのに…

活動・事業の内容・やり方は
昭和のまま?!

継承したいのは いまのやり方か？ 機能か？

福祉分野における「地域」の捉え方



中心に支援対象者がいて、それを囲むように様々な人・機関・団体がいる。

例) 障がい者 → 障がい者福祉
高齢者 → 高齢者福祉
児童 → 児童福祉

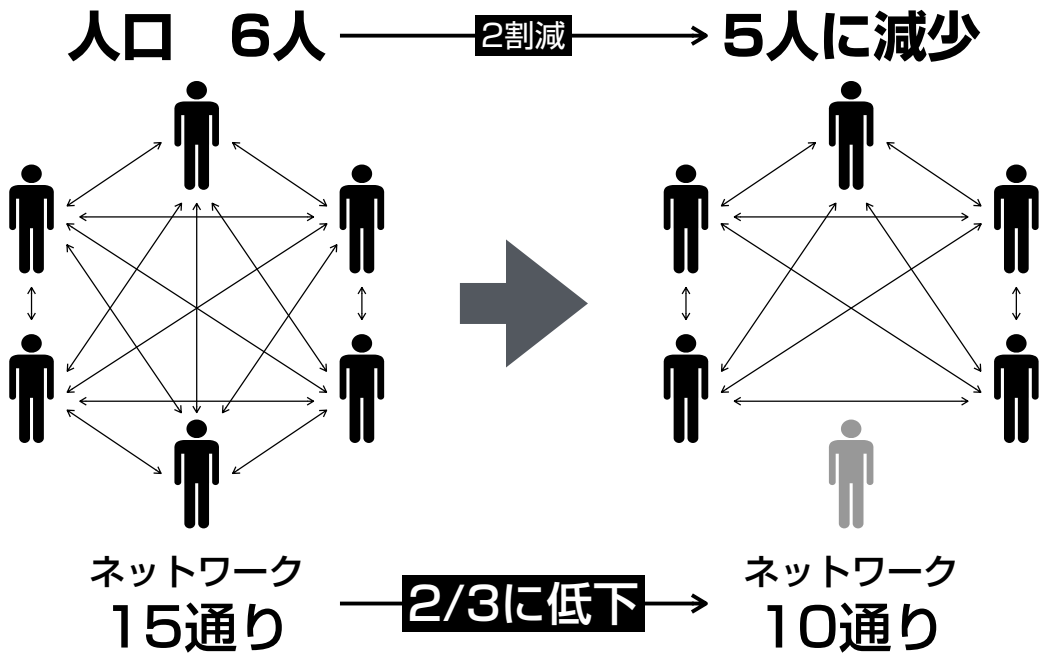
多様な人・機関・団体が
連携・協働して取り組む

||

地域が参画する
という考え方

しかし…
学校教育 (CS) ・農業 (農村
RMO) ・孤立対策等の分野で
も同様に構図を描いて施策展開
がされている

地域人口とネットワーク（人間関係）の関係



地域の役職・共同作業・行事・事務作業・会議出席など
残された人の負担増加⇒他出⇒負担・・・（負のスパイラル）

住民を取り巻くネットワークは
人口減少の度合い以上に急激に低下する！

必要性だけで新たな活動を地域側に求めても
人口減少社会が急激に進展している中で
地域側にこれ以上の負担を強いるのは物理的に不可能！



ついでにやる / まとめてやる

足し算ではなく掛け算で考える！



やる側ファースト

地域には多様な分野・領域の役割・機能がある！

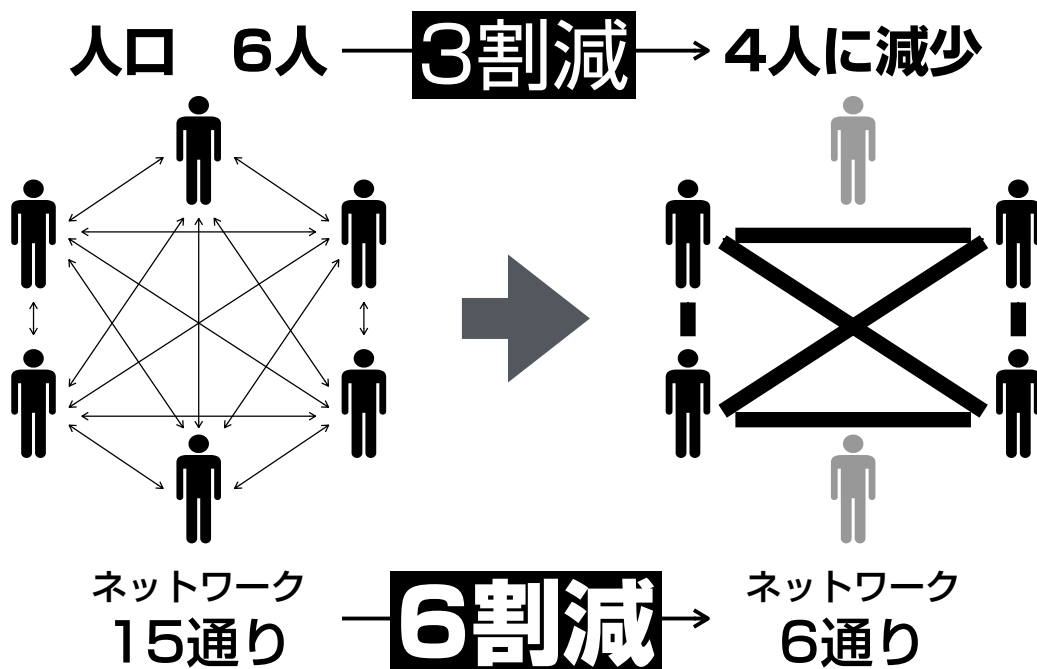
分野から見れば地域は構成員の1つだが、
地域側から見れば**構成する一つ**の分野でしかない。



ポイントは掛け算！

一石二鳥・三鳥となるように複数を組み合わせる

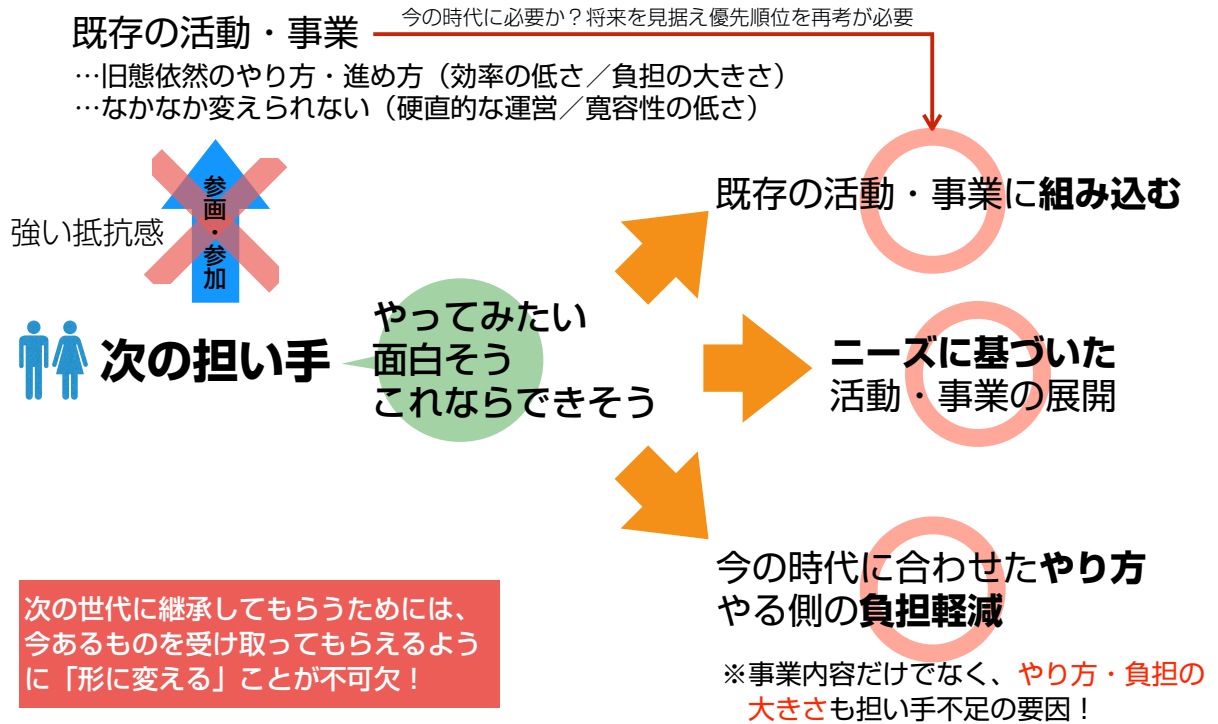
地域人口とネットワーク（人間関係）の関係



人交密度を高める！

量をコントロールして負担を減らし密度を上げる

活動・事業の見直し・再編なしに 担い手不足は解決しない！



地域を動かすのは個人ではなく「チーム」＝協働

コーディネーター

デザイナー／プランナー／ディレクター／監督 etc

◎具体的なシナリオ・絵を描き、形にする・動かす人

◎自分も動くし、他者も動かす

プレーヤー

担い手／実行メンバー／スタッフ／役者・裏方 etc

◎実行する人

⇒中心になって動く／特定の役割で動く

◎自分が動く

サポーター

ボランティア／応援団 etc

◎スポットで手伝う人

プロデューサー

企画を立て、素材を集め、整理し、組み合わせ、ソロバンをはじく人

それぞれの得意分野を活かして役割を明確化することが大切

対話の場は 地域の自己解決力を 高める！

集落座談会を各地で開催

【新潟県村上市朝日地区】 集落単位で住民座談会を実施



堀野集落座談会の様子 (R3.1.31)



十川集落座談会の様子 (R5.10.28)



大場沢集落座談会の様子 (R4.12.11)



北大平集落座談会の様子 (R6.1.21 / 2.11)

中学生以上を対象にした 全住民アンケート

新潟県村上市朝日地区 住民アンケート結果より

【実施概要】

実施時期：2021年7～8月
 対象：中学生以上の全住民
 実施主体：朝日地区・5まちづくり協議会
 実施方法：直接配布・直接回収形式
 集計分析：都岐沙羅パートナーズセンター

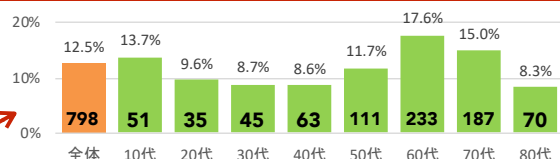
【配布・回収状況】

地域名	配布数	回収数	回収率
舘腰	1,733	1,521	87.8%
三面	874	801	91.6%
高根	1,738	1,561	89.8%
猿沢	1,383	1,234	89.2%
塩野町	1,387	1,268	91.4%
計	7,115	6,385	89.7%

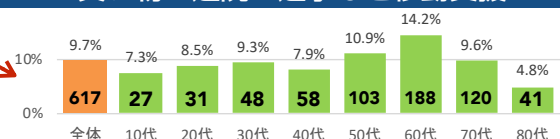
Q.やってみたい・協力できることは？

地域名	ご近所の掃除やごみ出し等手伝い	見守りや配食など高齢者の生活支援	買い物・通院・通学など移動支援	ご近所の庭作業、電気器具修理等の軽作業支援
舘腰	187	141	136	123
三面	94	55	73	64
高根	198	152	158	110
猿沢	143	115	125	88
塩野町	176	117	125	101
計	798	580	617	486

ご近所の掃除やごみ出し等手伝い



買い物・通院・通学など移動支援

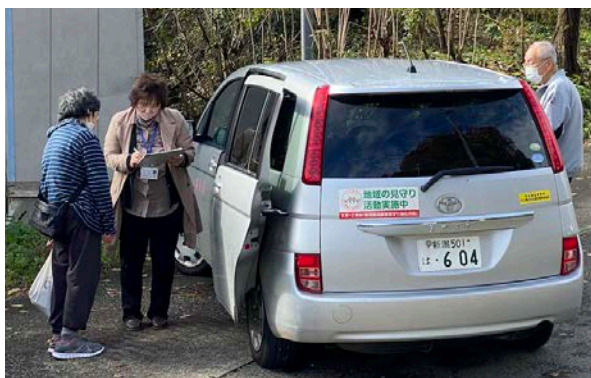


ささえあい活動に協力できる人は
どの年代にも一定数いる！

住民有志による移動支援の仕組み

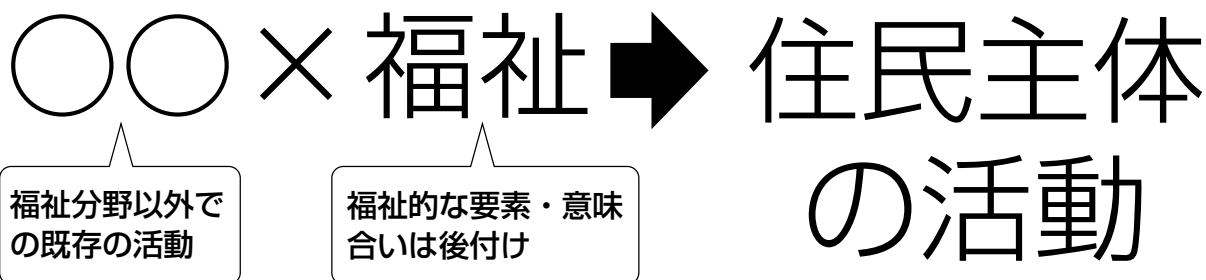
～新潟県村上市朝日地区～

- 令和2年度からスタート（最初の3カ年は試行）
- 住民有志で実行委員会を組織し、地区内の高齢者福祉施設の車両を活用して、移手段に困っている高齢者の買物送迎を年6回実施。
- ボランティア8名/回
使用車両4台/回
- 参加費+まち協からの補助金で経費を賄っている
- 生活支援協議体（2層）で仕組み化



既存の取り組みの 意味をイノベーションする

既存の活動に対して
福祉的な意味合いを付加する（＝編み込む）ことで
活動の意義・社会性が再構築され
負担を増やさずに住民主体の活動となる



この蓄積が住民主体の「共助」になる

必要なのは
地域外の力との協働なのか？

福祉分野外との協働 (分野横断) ではないのか!?

問いを持った部族は生き残ったが、
答えを持った部族は滅びた。

～ネイティブ・アメリカンの諺～

ママのHOTステーション



ママの声が届くと、
まちはもっとやさしくなる

株式会社ママのHOTステーション
倉嶋 香菜子

事業概要

- 会社名 株式会社 ママのHOTステーション
- 設立日 2024年1月18日（活動は2020年7月～）
- 代表者名 倉嶋 香菜子
- 所在地 北海道十勝(音更町)
- 事業内容 居場所づくり・多世代交流支援



HP

「ママの一步をもっと、自由に」

このミッションのもと、0・1歳児の母親が安心して外に出られ、気軽につながれる“居場所”づくりを起点に活動しています。企業や自治体と連携しながら、母親と地域・社会をつなぐ活動を行い、孤立しやすい産後期のママが、「地域から応援されている」と感じられること。

ママの居場所づくりを入りに、**人が育ち、関係が生まれ、地域が少しずつ元気になっていく。**
そんな循環を、現場から実践しています。



ご挨拶・自己紹介

タレ目保育士 くらかな



倉嶋 香菜子

Kurashima Kanako

株式会社ママのHOTステーション

♥ 社会福祉の現場と自身の経験

ずっと社会福祉に携わり、何千人もの
お母さんの声を聞いてきました。
私自身も3人の息子を育てる中で、
たくさんの孤独と惨めさを味わいました。

💡 子育て中の大きな気づき

外出先や近所で積極的に声をかけてくれた
のは、いつも高齢者の方々でした。この
温かい交流が、私の心を救ってくれました。

🚀 ママのHOTステーション設立

「産後ママ達と高齢者さんを繋げたい」
という想いで立ち上げ、5年半が経過。
ビジョンはより明確になっています。

MISSION

地域を越えて、
ママ、赤ちゃん、
高齢者の方々の
憩いの場を提供する

保有資格

保育士
介護支援専門員

👤 プライベート

大阪出身(2020年移住)
小中高校生男子
3人の母です

History

活動歴タイムライン

2020.3

大阪から十勝
(上士幌町)へ移住

コロナ禍の始まりと
共に新天地・十勝へ

2020.4

地域おこし協力隊
配属

生活支援コーディネーター
として地域活動をスタート

2020.7

ママの
HOTステーション
開始

0歳児ママのコミュニティ
作りと多世代交流への展開

2023.2

菅元首相・知事が視察

高齢者活躍にもつながる
「ベビチア」活動を評価

2024.1

法人 設立

企業とコラボし、
地域を超えた展開へ

From a single step to a regional
movement.

2020年 7月

移住3カ月後に始動

ママのHOTステーション



見知らぬ土地で、孤独を感じていた自分だからこそできること。同じ思いを持つママたちの「居場所」と「出番」を作る。小さな一歩が、ここから始まりました。

Activity Scene

高齢者達が集まる場の横で ママのHOTステーションを開催

自然な多世代交流の始まり



実際の活動風景

2020年

上士幌町生活支援体制整備事業の活動として実施

「見守る」と「見守られる」 自然な交流に繋げる

特別なイベントとして構えるのではなく、高齢者の日常の集いの場の「すぐ横」で開催。子ども達の声が聞こえる距離感が、双方にとって心地よい交流を生みました。



十勝の人々の温かさ



自然なつながり

Create a place where generations meet naturally.

乳幼児救命講習実施

2021年 9月



開催期間
2日間

参加人数
80名

対象
ママ&赤ちゃん

高齢者さん(大先輩ママ)の見守る力

初対面のベビチアさんも多かったのですが、見事に赤ちゃんをあやしてくれて、これにはママ達もびっくりだったようです。

ママ達が安心して講習に集中できる環境を、地域の方々の温かい手が支えてくれました。

▶ 当日の様子をチェック
動画を見る



✔ ただの託児ではない、「地域で育てる」の実践

コミュニケーション手段

多世代をつなぐ多様なアプローチ

世代に合わせた手段を選ぶことで、無理なく自然につながり合える

温もり



お手紙

手書きの温かさを届ける
心に残る深い交流

手軽さ



LINE

気軽な連絡手段として
日常的に活用する接点

視覚的



Instagram

ストーリーや投稿で
活動の様子を発信
24時間気軽に交流

高齢者

若者・ママ世代

北海道 十勝地方

道内の町村で最も人口が多い

音更町

(おとふけちょう)

豊かな自然と都市機能が調和した、
活気あふれる十勝の中心的な町です。



人口

42,157人
(R8.1月現在)

高齢化率

30.2%

少子高齢化への対策も進行中

2024年1月～

地域を越えた
交流が始まりました

一つの町だけで抱えず、
十勝全体でつながり直す発想が
重要になります。

孤立は“点”で起きるが
つながりは“面”で効く

十勝の広さをイメージする



北海道 十勝
約10,830 km²

岐阜県 全域
約10,620 km²

十勝地方だけで岐阜県とほぼ同じ広さ。
この広大なエリアを「面」としてつなぎたい

ママは、社会課題の交差点



行政だけでは届かない「現場」

なぜ、支援が必要な人に届かないのか？

「相談に行く勇気がない」



心理的ハードル

「制度があること自体、知らない」



情報の断絶

「あと一歩が踏み出せない」



物理的・時間的制約

日常の「困った」は、
窓口ではなく現場で起きている。

● だから私たちは、「待つ」のではなく「現場のそば」へ

私たちの立ち位置

行政・企業と、現場の「あいだ」をつなぐ架け橋

ママのHOTステーション
CONNECTOR

制度・資源・想いはあるが
現場へのルートがない

行政・企業

悩み・ニーズ・可能性はあるが
声の上げ方がわからない

現場

● 2024年からは企業を巻き込んで活動を継続



- 出張形式で開催
現在は十勝（音更、帯広）、大阪で開催
- 予約不要、出入り自由、無料
- 自由に過ごし、さまざまな世代と出会える場所

無印良品店

柔術道場

co-op さっぽろ

キッズカフェ

イオンスタイル



Our Partners

協力企業（敬称略・順不同）

社会貢献を理念とする多くの企業様と共に、ママ支援の輪を広げています。

HOKKAIDO 北海道

生活協同組合 コープさっぽろ

森永乳業北海道 株式会社

株式会社 良品計画

OSAKA 大阪

敷島製パン株式会社
(Pasco)

南海電気鉄道 株式会社

イオンスタイル
(イオンリテール株式会社)

*Creating shared value
together.*

Case Studies

 それぞれの強みを活かした共創

企業連携事例 ～Win-Winの関係構築～

無印良品 × ママHOT



課題・背景

店舗内のスペース活用と、子育て世代へのアプローチ。地域貢献。

成果

企業も気づかなかった商品活用アイデアがママから多数創出。店内のお客様との多世代交流も。

イオンスタイル × ママHOT



課題・背景

お客様の開拓、ママ世代へのアプローチ。

成果

子ども服エリアやスーパーで買い物するママが増え、売り上げにも貢献できている。店内で多世代交流も。

COOP さっぽろ × ママHOT



課題・背景

素晴らしい子育て施設を持っているが、認知度が低く利用者が少なかった。

成果

認知の拡大、利用者の増加。本部から社員研修の依頼も。

官民連携事例～行政×企業×ママHOTで広がる可能性～

十勝の事例



公共交通イベント 「赤ちゃんバスに乗ろう」

役場 × 無印良品 × 北海道運輸局

公共交通の利用促進を目指し、実際の車両を使った体験イベントを開催。無印良品も協力し、お出かけの楽しさを演出。

ここがポイント

専門家との座談会も実施。ママの生の声を交通政策にフィードバックする場としても機能。



行政だけでは予算やリソースが足りない時も、企業を巻き込めば不可能が可能になる。

官民連携事例～行政×企業×ママHOTで広がる可能性～

大阪の事例



リハビリ体操 + ママHOT + 抱っこレース 同時開催イベント

区役所 × イオン × Pasco × MediGo

「高齢者の一歩」を応援する企業と、「ママの一歩」を応援するママHOTがコラボ。世代の垣根を超えたイベントを同時開催し、交流につなげていく。

ここがポイント

赤ちゃんの居場所を常設しておくことで、リハビリ体操参加者の高齢者とも交流ができ、また、企業協力により参加者にプレゼントも用意。



行政だけでは予算やリソースが足りない時も、企業を巻き込めば不可能が可能になる。

活動の変遷 (2020 - 2026)

01



コミュニティ
醸成

まずは自宅から一歩外へ。
ママ同士のつながりを作り
安心できる居場所を育てる

02



多世代
交流

コミュニティの強みを活かし
地域の高齢者や 他世代との
自然な交流を開始

03



企業
コラボ

行政だけでは難しい課題を
企業と連携して解決。
Win-Winな仕組みを構築

04



全国
展開

北海道を拠点に、
ママネットワークを拡大。
地域の課題解決に挑む

注目



2026年は「産学官連携」も視野に入れた動きを

ママのHOTステーションは、「ただの居場所」ではなく
「地域共創人材を育てる実装型モデル」にもなり得る

Expanding impact from local to national.

🏠 あなたのまちにも、ママのHOTステーションを。

ママの一歩をもっと、自由に。

支援される側から、地域の担い手へ。

子育て中の「孤独」を「つながり」に変え、
ママたちが本来持っている力を
地域社会で活かせる仕組みをつくります。

#コミュニティ

#人材発掘

#社会参加



Since 2020

農業・福祉・交流で地域が元気になりました!



花巻八景「平良木の立岩」

岩手県花巻市高松第三行政区ふるさと地域協議会
事務局長 熊谷哲周

高松第三行政区とは

- 岩手県花巻市の東南部に位置する中山間地域
- 1968年（昭和43）に開田
- 2021～2023年に、ほ場整備事業 70ha
- 3集落 世帯数68世帯、高齢化率40.44%
- 一人暮らし高齢者と高齢者のみの世帯が40%
- 公共交通機関なし、一番近い店まで4km



☆地域づくりのきっかけ

2007年(平成19)頃、集落の公民館での会話

「人口減少と高齢化が進んでいる。

このままでは限界集落になるのではないか」

「不便だからと集落から出ていく人たちが増えている」

現状に危機感を持った6人の有志が何度も話し合い

地域づくりの任意組織を立ち上げようと設立総会を開催

→ところが、参加者は全員反対

「失敗するからやめろ」「失敗したときの責任はだれがとる」

「そもそも地域住民の合意は得ているのか」・・・

6人の発起人が「責任をとるから」と言って説得

2008年(平成20)協議会設立

3

☆2010年(平成22年)アドバイザーからの助言

郷土芸能の伝承、景観形成、耕作放棄地対策、

出身者アンケート、研修会・・・

なんでもやってみよう! しかし・・・しょせんは素人

2年目には活動に行き詰まり、

アドバイザー(内閣府地域活性化伝道師 志村尚一氏)に相談

- **個人の困ったは、やがて地域の困ったになる**
- **「このままでは、いけない」という住民の意識改革が必要**
- **地区の将来ビジョン(実践したい未来のありたい姿)が必要**
- **ビジョンを実現するためには、行政はじめ様々な団体との「協働」が必要**

4

☆2011年（平成23年）ビジョン策定【農福連携開始】

2011年（平成23）アドバイザーから紹介された
岩手県立大学社会福祉学部の宮城教授の指導により
「農業」・「福祉」・「交流」をテーマにした
『ふるさと交流福祉計画』（ビジョン）を策定
農福連携による地域づくりが具体的に動き出す



5

☆耕作放棄地対策で始めた貸農園で予想外の出来事が

「こんな山の中に、貸農園を作って人が来るのか？」と地元住民
「私は、良い取り組みだと思っんですよ」と移住者

17区画の利用者の約半分が地元住民

みんな、家に畑があるのに・・・

- 「ひとり寂しく畑で仕事をしていても楽しくない
ここに来ると人がいて会話と交流ができる」
- 地区外の人から「先生、教えて」と聞かれて、びっくり!



6

☆遊休農地がどんどん増える

福祉農園の設置

- 里山に自生している『ガマズミ、ナツハゼ』を遊休農地に植栽
→木の実をゼリーに加工・販売
- サツマイモを遊休農地で栽培
→干しイモに加工・販売
- 作業の中心は60～80歳代の高齢者
- 障がい者やこども園の園児も作業に参加
交流・生きがい・お小遣い・・・様々な効果が生まれた
- 交流人口 0人→2,600人（2024年）へ
にぎわい・笑顔・交流の輪が広がる



7

☆ワークショップに一工夫

「あなたが子供のころに食べた木の実は何ですか？」



☆「これを目指したかったんだ」という気づき

「山に自生しているだけだったガマズミ、ナツハゼといった地域資源が利益を生み、笑いのあふれる場に生まれ変わった」2023年11.29読売新聞「農地活用 集落を超えて」



8

☆生活支援の取り組み 「これって、道路運送法違反じゃないの？」

個人の困ったは、やがて地域の困ったになる。早めの対策を！

2015年（平成27）

「母を病院に連れていきたくても仕事が休めない」とSOSが協議会へ
2016（平成28）～2017年（平成29）

農水省の交付金を活用して、外出支援の社会実験実施

2018年（平成30）～ 花巻市介護予防・日常生活支援総合事業により継続
2020年（令和2）～

中山間地域等直接支払制度第5期対策・集落機能強化加算を活用

- ① 外出支援の対象者拡大
- ② 配食サービス（見守り活動を含む）拡充
- ③ 除雪支援開始



根拠：道路運送法における許可又は登録を要しない運送に関するガイドライン
令和6年3月1日発出 国土交通省物流・自動車局旅客課長

9

☆移住者のチカラ・地域のチカラ

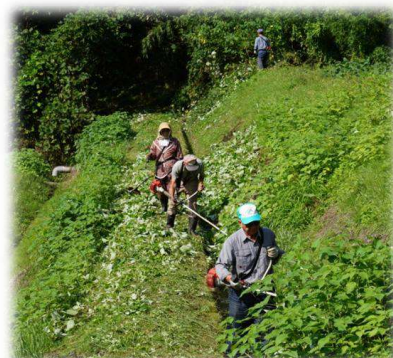
「私たちは借金して、ここに家を建てましたから」という覚悟

協議会の活動を始めてから、

1 3世帯が移住＋2世帯がUターン＋3世帯が孫ターン

地区の貴重な人材として活躍中

- 消防団員
- 集落公民館役員
- 狩猟免許を取得し鳥獣被害対策指導
- 危険樹木の伐採
- 神楽の後継者



10

四季

2025.1.10

「移住者が昨年も2組増えたよ」。岩手県花巻市の農家、熊谷哲周さん(69)はうれしそうに語った。哲周さんが暮らす集落68世帯のうち、16世帯が移住者に。高齢化率は45%から40%に下がった▼こんな田舎になぜ？ 哲周さんが尋ねると、移住者たちは口をそろえた。「この景観が一番きれいだったから」。同地区はみんなで草刈りをする。田植え後の6月から8月盆までの日曜、朝6時から1時間。移住者は暮らして初めて、魅了された景観が自然のものではなく、人が手入れをしてできたものだを知る▼集落の合言葉は「困り事は皆で解決しよう」。地域で協議会をつくり、通院や買い物なども助け合う。福祉農園では老若男女がサツマイモ掘りを楽しみ、農地は談笑の場になる。協議会事務局長を務める哲周さんは「移住する若者たちは借金して覚悟を持って来てくれる。それに応えたい」▼ある日の草刈り。移住した若者を気遣い「参加、無理しないで」と言った。ところが若者から返ってきたのは「農地は自分たちの宝物ですから」。その言葉が哲周さんの宝となった▼2023年度の全国の移住相談件数は40万件を超え、過去最多に。農に向かう人は増え続ける。今日は1と10で「移住の日」。

11

☆ビジョンを実現するための「協働」のチカラ

連携する9団体

- 花巻市（農政課、農村林務課、長寿福祉課、障がい福祉課）
- 花巻市社会福祉協議会
- 花巻市中央地域包括支援センター
- 岩手県立大学
- 東北福祉大学
- 障害者支援施設やさわの園（岩手県社会福祉事業団）
- 障害福祉サービス事業者こぶし苑（就労継続B型）
- やさわこども園（幼保連携型認定こども園）
- JAいわて花巻

12

☆協議会の設立前

農村の問題を農家だけで解決しようとしていた

人口減少と高齢化

従来の考え方や縦割り組織では、対応ができないほど

問題が複雑、多様化!

協議会 設立



農業や生活の課題を一緒に考える場ができた

「このままではいけない」
という危機感の共有

ビジョンの策定で
前へ

協働のチカラで
成果

13

☆協議会の設立後

他人事から自分事へ

住民主体
+
様々な団体との
連携

農村RMO

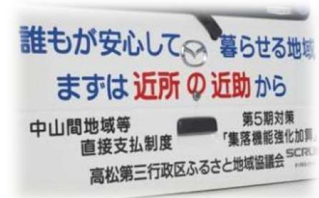
農用地の保全



地域資源の活用



生活支援



「ありがとう」「ごくろうさま」 …地域に明るい声が!



「制度は手段、住民主体・行政(連携団体)参加」で前へ! 行動することで未来が拓ける!

14

☆今までの活動の成果

1 農用地の保全

- ・同意率100%のほ場整備事業
- ・保全活動に移住者が参加 → 地域ぐるみの活動へ



2 地域資源活動

- ・福祉農園設置で高齢者の生きがい創出
- ・農福連携で交流人口が0人 → 2,600人へ



3 生活支援

- ・外出支援、見守りを兼ねた配食サービス、除雪支援
- ・誰もが安心して暮らせる仕組みが出来上がった



15

☆これから

1 10年後を考える人材育成と仕組みづくりの取り組み

- ・元気な地域創出モデル支援時事業（R7～R9）
- ・最適土地利用総合対策（R6～R10）



2 農福連携を前へ

- ・遊休農地を活用した「高齢者の社会参加と介護予防」の実証実験（R8予定）
- ・実証実験後は花巻市介護予防・日常生活支援総合事業により横展開へ



16

☆最近、嬉しかったこと!!

- 新規移住者により、高齢化率が46%から40%に下がった！
- 移住者の子供が増えて、スクールバスのバス停復活！



地域外の力を活かす 福祉協働事例



一般社団法人 高根コミュニティラボあら

2026.2.12 能登谷愛貴

新潟県村上市高根



- ▶ ■基本情報
- ▶ 活動地域：新潟県村上市高根
- ▶ 面積：9,850ha
- ▶ 世帯数：149戸
- ▶ 人口：453名
- ▶ (男215名・女238名)
- ▶ 高齢化率：44%
- ▶ 未就学児10名
小学生13名・中学生6名
高校生6名
- ▶ ■観光情報
- ▶ 日本の滝百選「鈴ヶ滝」
- ▶ 戦国時代全国一「鳴海金山」
- ▶ 約80ha 山間部の「棚田」
- ▶ 標高634m「天蓋山」

令和2年度（第59回）農林水産祭（むらづくり部門） 天皇杯 地域みんなでいただきました



人口減少

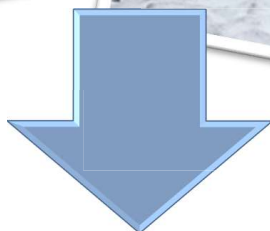
空き家増加

少子高齢化

後継者問題

イベント型事業

複数役負担増



地域課題を時代の流れと受け止め
若い世代が**未来志向**で
わくわくする取り組みを増やす!



子どもたちのために…
高根のくらしを
つないでいきたい!!



わあら団体概要

- 団体名：一般社団法人高根コミュニティラボわあら
 - 設立年月日：2016年5月25日
 - 代表理事：遠山真治
 - 理事：鈴木信之・能登谷創
 - 監事：遠山充・遠山俊之
 - 事務局：能登谷愛貴
-
- 新潟県村上市高根区で高根のため、高根の子どもたちのために高根の未来を考え、活動する団体です。高根にある豊かな自然を活かした暮らしをつなぎながら、高根に暮らす人たちが生き活きと、笑顔で楽しく過ごしていくため、40代以下の世代を中心に“これから”を見つめていきます。
 - 空き家の活用、子どもから高齢の方までが集える場づくり、地域内外との交流促進など、今ある課題と向き合いながら、高根に暮らす人たちが「大好きな高根にいて良かった」と言い合える、そんな私たちのための高根を、私たちの手で創っていくため、“わあら”は動き始めます。
 - わあらとは高根弁で「私たち」という意味

事業内容 1 -高根をむすぶ-



福祉・交流

子どもからお年寄りまで、世代を超えて気軽に集える場づくりに取り組んでいます。



教育・子育て支援

子どもたちが集い、学び、遊び、高根愛を育む機会を設けています。そして、親子ともに高根で楽しく、イキイキと暮らせるようなサポートを行います。



かける×プロジェクト

未来へつながるワクワクするプロジェクトを展開しています。地域課題を踏まえ、限られた1つの事業で複数の効果を得る“かけ算”を意識した活動です。



各種調査事業

棚田の耕作状況調査、空き家の現状調査等、地域課題に関する調査事業。地域の現状を見える化することで、皆で未来を描くための第一歩を踏み出すきっかけ作りを行います。

子どもからお年寄りまで…
高根愛を育み、笑顔でイキイキと暮らす

事業内容 2 -高根をつなぐ-



たかねびと

サポート

高根に暮らしていなくても、共に高根の一員として生き、高根の暮らしを未来へつないでいく。高根を好きになってくれた“あなた”と高根との多様な関わり方を提案する準村民制度です。



ゲストハウス瑞泉閣

宿泊・体験

昭和3年建築の古民家をリノベーションしたゲストハウス。“あなた”と高根の距離を近づけ、高根暮らしの空気を味わっていただく宿泊・体験施設です。



シェアハウスべったく

滞在

高根に中長期滞在し、高根暮らしを経験したい若い人のためのシェアハウス。高根へ通ってくれる“あなた”に住んでみないと分からない高根の魅力を体感していただく施設です。

高根の未来を共に考える仲間を増やし
都市部の人々の心のふるさとに…

6

活動で大事にしていること

高根にある「小さな小さな拠点」が生み出すもの

多世代多地域交流と活躍の場



高根にある「小さな小さな拠点」が生み出すもの

地域の宝を発掘・活用・発信



高根にある「小さな小さな拠点」が生み出すもの
かけ算事業で相乗効果！



空き家活用

×

地域外人材

空き家改修

- 築90年の別荘を借り、拠点として活用
- 高根の人（大工・左官等）に改修作業の指導をしてもらう
- 作業は地元の若者、共存の森ネットワーク学生、キヤノンMJグループ社員、新潟大学学生、フロンティアクラブなどと協働して取り組んだ
- 地域外との交流拠点としての活用も目指し、簡易宿所の許可を取得



小さな小さな拠点 『瑞泉閣』 誕生！



空き家活用
×
高齢者福祉
×
地域外人材

高根いっぷくどころ

- 村上市介護高齢課からの委託
⇒空き家活用・高齢者の居場所づくりをやりたい！
という相談から発展
- ボランティアスタッフ7名（お母さんたち）・事務局1名
アドバイザー2名
- 70歳以上単身、2人暮らしの人 約20世帯30人
- 毎週土曜日午前中に開催（参加者平均10名）
- 子どもやゲストハウス宿泊者も一緒に集う自由な場



いっぶくどころ × 学びの場

- みんなで持ち寄りランチ会
→ 郷土料理・山菜料理をはじめレシピ伝授の場に
- 耳の聞こえない方が宿泊されることをきっかけに
手話の教室開催
- 海外滞在経験のある学生さんが泊まってくれたときは
フランス語教室
- 歌や体操
- 笑いヨガなどなど



いっぶくどころ × 子どもの居場所

- 子どもたちも遊びに来て一緒にカルタ大会
- おばあちゃんたちの肩たたきをするなど交流がうまれる



いっぶくどころ × 観光交流

- 山菜下処理を行い、IRORIで販売
- ゲストハウス宿泊客を山菜採りへ案内
- 一緒にお料理づくり
- 盆踊り教室などなど…

おばあちゃんたちが
高根魅力発信
アンバサダーに！



いっぶくどころから派生

認知症カフェ「みかんちゃカフェ」試験開催

- 認知症サポーター養成講座の開催
- 高根の20代・50代女性作業療法士さんが中心
- 認知症について学び、本人と家族を皆で支えていきたい！



作品展などで趣味特技披露！



わあらの福祉

いきいきと元気に長生き

最大の地域貢献！

知恵と経験を活かし

地域・世代の垣根を越えて

活躍の場をどんどん増やす！！

高齢者の方も大事な地域づくりの担い手
高根で元気に楽しく年を重ねてほしい！

空き家活用
×
高齢者福祉
×
担い手育成
×
子育て支援
×
地域外人材

若い人たちの活躍の場づくり

- ・ハロウィンパーティー
(若者×子どもたち×集落の皆さん)
※ 仮装したい⇒子どもたちと楽しみたい・お年寄りの所回りしたい



企画・広報・運営を若者自ら全て実施 ⇒ 自信につながった
参画者11名・参加者27名・協力軒数27件

たかね夏ゼミ

- 子どもの数が減り、友達と遊ぶ機会が少なくなる
- 遊び場がないため家にいることが多い
- 夏休み期間、学生ボランティアが小学生向けに宿題を見てあげる場と遊びの場を提供（参加者平均：10名）
- 宿題の時間が終わったら・・・遊び+α
高根のことを知り、高根の人と触れあう機会をつくる！



キャリア教育



防災教育



福祉教育



足元を見つめて… たかねっこTV
子どもたちの郷土愛 醸成



おばあちゃんに習う郷土料理



かけ算で相乗効果！

高根クリスマス大作戦！



誰1人取り残さない！

笑顔あふれるクリスマス



ヘルスケアサンタの届け物



キッズサンタ大活躍！



手作りプレゼントをお届け！



お家の方が大喜び！！



サンタからのお礼パーティー



多世代交流のきっかけ



毎年すれば変化も見える

地域のことがよく分かる！



昔の写真カラー化カレンダー

- 友人・親戚と懐かしい話に花が咲く
→ カレンダーをネタに交流促進・介護予防
- 子ども・孫に当時の話をする
→ 歴史文化伝統継承
- 自分そっくりのおじいさんの活躍を見る
→ 郷土愛醸成・世代をつなぐ大切さを感じる

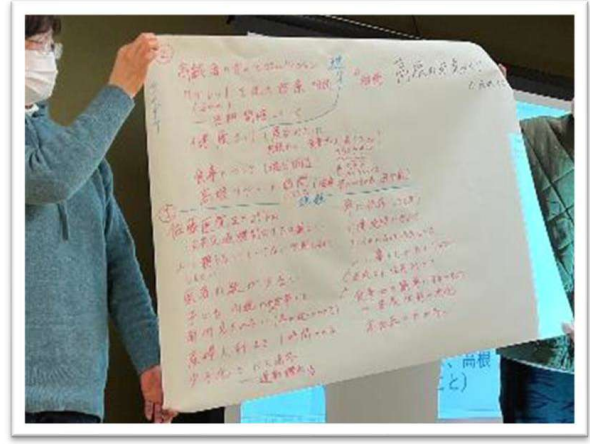


川柳で魅力発信！！



高齢者福祉
 ×
 地域医療
 ×
 子育て支援
 ×
 地域外人材

たかね元気づくりプロジェクト



高根の医療福祉従事者や村上病院医師・研修医・医学生と
高根の健康をテーマにしたWS開催

防災・交通・健康管理・老々介護など
様々な視点からの意見が集まった

WS&ヒアリング結果から 2つの企画実施

たかね元気づくりプロジェクト 参加費無料

高根で医学生と考える 在宅医療 講演会

ここ高根で1日でも長く元気に暮らすために、争点なことができるでしょうか？
この機会に自分のこと、家族のこと、地域のこと、ご近所の方のことを思い浮かべながら、
医学生の方と一緒に在宅医療がどんなものなのか学び、考えてみませんか？
平日夜のお忙しい時間かもしれませんが、皆様をおいそわの心でお気軽にご参加ください！

3/19(火) 19:30~20:30
高根区民会館

瀬賀医院院長 瀬賀 弘行 さん
 村上総合病院 矢島 聡 さん
 慶應義塾大学医学部 江口 暁貴 さん 他 研修医・医学生の皆さん

主催：村上総合病院、高根クリニックグループ、高根区コミュニティセンター 協賛：高根区

たかね元気づくりプロジェクト

無料

たかねっこ診療所 健康チェック会 キッズドクター大募集！！

村上総合病院の研修医や医学生の人たちからお医者さんのお仕事について
教えてもらい、一緒に高根の人たちの健康チェックをしてみよう！
高根に暮らす皆がいつまでも元気に笑って過ごせることを願って…
是非皆さんの力を貸してください！終わったら皆でお昼ごはんを食べましょう！
保護者の方も是非いらしてください！！ご参加お待ちしております！！

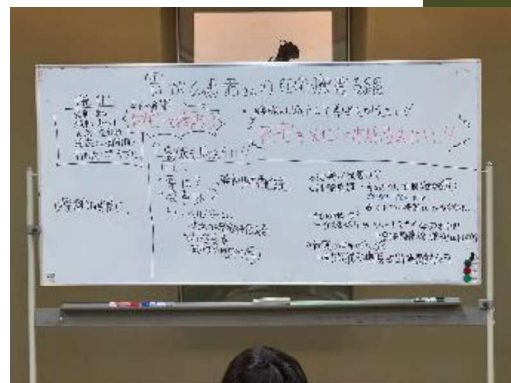
受付時間 3/20(水・祝) 9:00~12:30

会場 **高根区民会館**
内容 **お医者さんの仕事体験
参加者の健康チェック**

一緒に
もちつきも
しよう！

主催：村上総合病院、高根クリニックグループ、高根区コミュニティセンター 協賛：高根区

地域医療合宿 ①在宅医療勉強会



全国から集まった医学生と
在宅医療についての勉強会を開催
一人暮らし高齢者の方や家で介護している方などが参加

地域医療合宿 ②キッズドクター



高根の子どもたちが
おじいちゃんおばあちゃんの健康診断！
キャリア教育×地域内外交流につながる

医学生による健康講座



研修医 & 医学生による 小学生向け講座



応急手当や健康管理
生と死について考えるなど
普段できない学びの場

ドクターサンタの訪問×防災



孤立防止
見守り
健康づくり

伝統文化継承

食育
キャリア教育

地域魅力発信

高齢者福祉

×

人材育成

×

子育て支援

×

地域医療

×

空き家活用

×

地域外交流

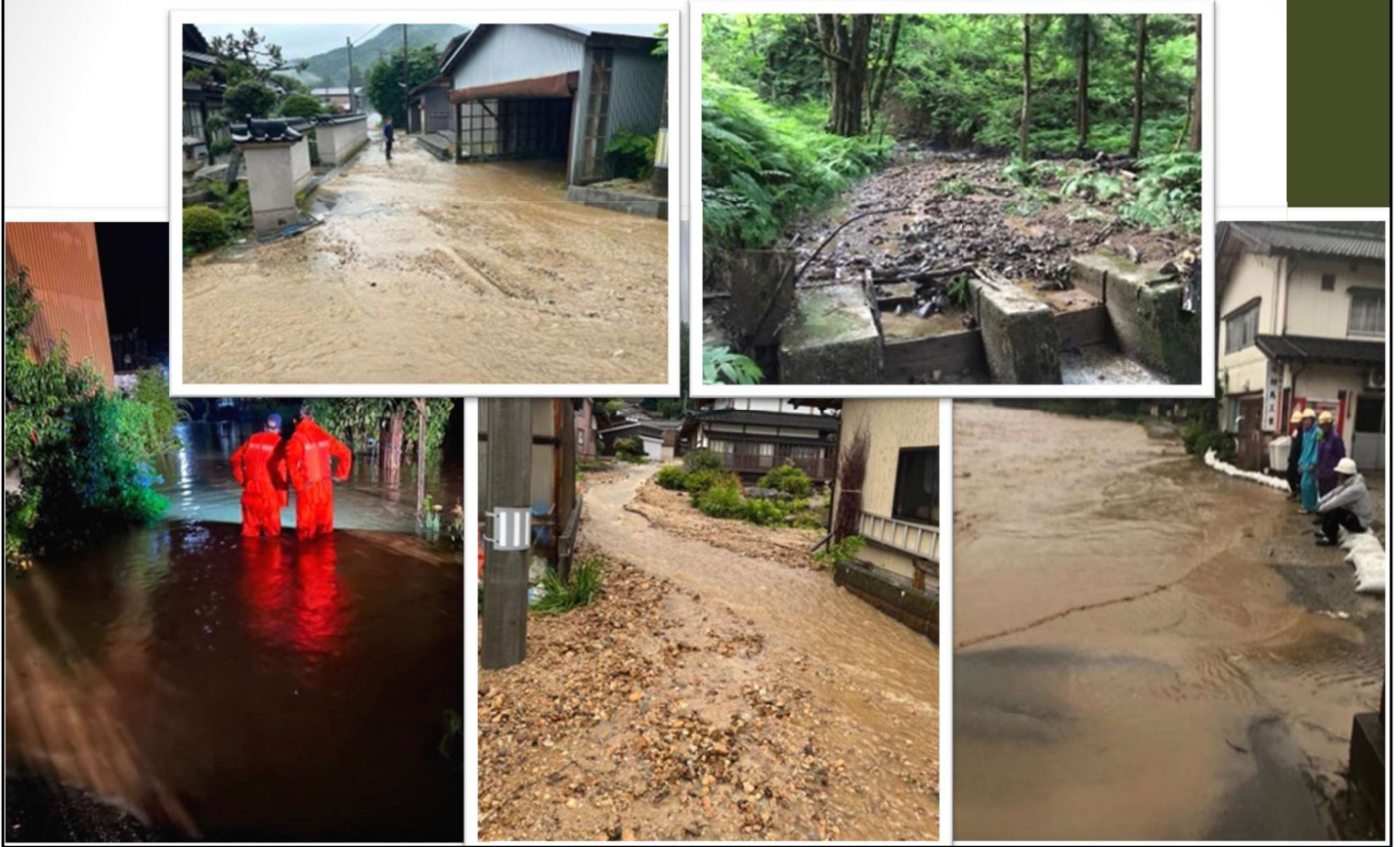
暮らし楽しみ
やりがい
生きがい

地域づくり
担い手増

郷土愛醸成

暮らし体験
第2の故郷

活動の全てが活きた災害時



8/5 ボラセン開設

- 8/6受け入れ開始
- 9日間、全国各地から130名受け入れ



8/11 真夏のサンタ大作戦 支援物資配布 & ヒアリング

- 高根の小学生から若者まで30名参加
- 折詰、水など配布と困りごとヒアリング



支援物資受付 寄付・チャリTシャツ販売

- Amazon被災地用欲しいもののリストを活用しニーズに合う物資を募集
- たくさんの方からの応援
- 数え切れない支援物資が届く





笑顔が何よりの原動力になる！！

人“交”密度を高め
高根の未来を
自分たちの手で創る！



是非、高根にお越しく下さい!!



食堂IRORI

• WEB : <https://takane-net.jp/guide/145/>



高根コミュニティラボわあら

• E-mail : info@takane.ne.jp

• WEB : <https://takane.niigata.jp>



WEBSHOP高根屋

• WEB : <https://shop.takane.niigata.jp>



「地域外のカ」協働事例ヒアリング

ヒアリング日 _____ 月 _____ 日

対応者 _____

- ・ 世帯数、人口
 - ・ 高齢化率
- } 資料事務局で(主として国勢調査データ)

※ 全て聞くのではなく、活動内容等により選択

1. 活動組織について【属性項目】

1) 組織名

--

2) 法人格

なし

NPO法人

一般社団法人

その他 (_____)

3) 組織の性格

① 自治会、町内会、まちづくり協議会 全世帯加入(該当すれば○)

② 地域に基盤を置く有志・志縁組織(ボランティア等含む)

③ その他

- ・ 構成員は、どのような方か
- ・ どのような経緯(目的)で発足したのか
- ・ 構成メンバーの数と、実際に活動している人数 (おおよそでも可)

★組織を説明するパンフ等があれば、それをいただく★

2. 活動内容について

1) 活動対象(対象属性、対象年代、対象地区等)

※実質的な限定の有無も

厚生労働省 令和7年度 老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業
「地域外の者の関与もふまえた互助の持続可能性を高めるための地域づくりのあり方に関する調査研究」報告書

発行日 令和8年3月31日
編・発行 特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）
〒983-0045 宮城県仙台市宮城野区宮城野 1-7-7
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
<https://www.clc-japan.com>
